

## 調査を実施して

子どもたちが何らかの問題をひき起こすとき、常に悪者よばわりをされるのは、母親と決まっている。何かにつけて母親は、諸悪の根源というわけである。

確かに、問題児の臨床において発達のゆがみを示す子どもには、必ずと言ってよいほど母親像のゆがみがある。治療家たちは、子どもに対して直接アプローチするより先に、まず母親にアプローチしてその行動の改善をはかる。

しかし、このような図式には時にあやまりがある。母親たちは、確かに子どもの成長にとって一つの重要な環境ではあるが、逆に母親が、子どもの健康な成長や発達に助けられて、母性を育て、人間としての成熟度を高めていく様子を、教育相談の臨床に携わるわれわれは、よく見聞している。すなわち悪い母親は、子どもの成長や発達を阻害した悪い環境であると同時に、何らかの理由で「導きの星」として、心身の健康性の高い子どもに恵まれなかったため、よく成長し得なかった（気の毒な）母親でもある。子どもと母親は、互いに相互作用のうちに、双方とも成長し発達（成熟）していく運命共同体なのである。

クリニカル・サイコロジスト（臨床心理学者）としてわれわれは、子ども——特に問題児とよばれる子どもとその母親のさまざまな姿を、クリニックの現場で見聞してきた。良き母親たることは、この人生において極めてむずかしい仕事の一つのように思われる。特に、一人前になるまでに長い期間を要するヒトという種においては、その母親役割を十分に果たすことは、予想外に困難な課題ではなからうか。人が悪しき母親となるか、良き母親となるかは、ちょっとした運命のいたづらによるささいな差から決まってしまうようにも思われる。

さて、常々われわれは、こうした問題児の母親だけでなく、ひろく母親一般の姿に多少とも調査的分析的に接近したいと考えていた。ここに福武書店から機会を与えられて、「中学生のお母さん」の調査を手がけることができたのは、たいへんしあわせだったと思う。

この「モノグラフ・中学生の世界」はすでにVol. 1で「中学生の学校生活の楽しさに関する考察」を、Vol. 2で「中学生の余暇」を刊行してきたが、そうした中学生たちの背後にあつて、有形無形の影響を及ぼしている母親たちの実態を、このVol. 3「中学生の母親の意識」でお読みいただければと思う。

われわれが、調査的にとらえた「中学生のお母さん」すなわち中年の主婦像は、何やらそこそこのしあわせ感に支えられ、子どもの勉強以外にさほどの悩みも大きな危機感もなく毎日を過ごしている平穏な姿が浮かび上がってきたが、一方では、なにやら重たく動かない集団という感じも迫ってきて少しゆううつでもある。

最後に、今日のように林立する教育産業の中で、単なる教材作りを目指すだけではなく、このような調査を通して今日の中学生の意識や行動にアプローチし、そのデータを教材作りにも反映しようとしておられる福武書店の社長・福武哲彦氏をはじめ、編集、営業の方々にも、敬意を表わしておきたい。またわれわれに、研究者的関心の一部を充足させる機会をお与え下さったことにも、感謝したい。

昭和54年3月

東京学芸大学助教授 深谷 和子  
日本女子大学・大学院 川島 洋子

# I章 調査の概要



## 1 調査の目的

一人ひとりの子どものうしろには、それと同じ数だけの母親の存在がある。その子どもへの期待に熱くなった眼差しを予想すると、われわれ子どもを取り扱う立場の者には——とりわけ教師には——それがふと重荷に思われてくることがある。なぜなら、その子どもが中学生であれば、背後にある母親の歴史もまた、重く長いものに違いない。夫となる人と出逢い、結婚し、初めての子どもを出生して母親となる。その子どもが小学校へ入り、そして中学生に……ある意味では、女性の一生のうちでいちばん華やかで充実した時期であり、そしてもう少し正確に表現するなら、その夢や期待がそろそろ破綻のかけを見せ始める。中年と名づけられた年齢は、残酷な時期でもある。いったい中学生の背後でそれぞれの母親たちは、何を考え、何を願い、どんな見通しをもって、暮らしているのだろうか。それはどのような推進力として、また圧力として、子どもの上にふりそそいでいるのだろうか。本調査はそうした観点から、中学生の母親を対象に、その欲求や生活を明らかにしようとして行われたものである。

## 2 調査票の構成

本調査の調査票の詳細については巻末に調査票を添付したが、ほぼ次のような構成になっている。

- ① Face Sheet —— 年齢・家族構成など
- ② 自分について
- ③ 夫について —— その性格と満足度

- ④ 子どもについて —— その評価と将来への見通し
- ⑤ 母親たちのしあわせ度
- ⑥ 将来への展望

### 3 サンプルの概要

調査対象は、東京と名古屋にある四つの公立中学校の子どもたち（1～3年）の母親で、担任を通じて調査票を配布回収した。サンプル総数は1114名。調査の実施は昭和53年7月であった。

対象となった母親の年齢構成は、図1のとおり。35歳から44歳までの者が79%でほとんどだが、45歳以上の者も18%。いずれにせよ中年の主婦層である。仕事の内訳（図2）では、専業主婦は49%と、意外に低い。フルタイムで働いている者は12%と多くはないが、家業の手伝い17%、パートタイマー18%と、いずれにせよ子育てを終わりにかけた年齢の主婦たちが、再就職し始めている様子が表われている。

図1 母親の年齢

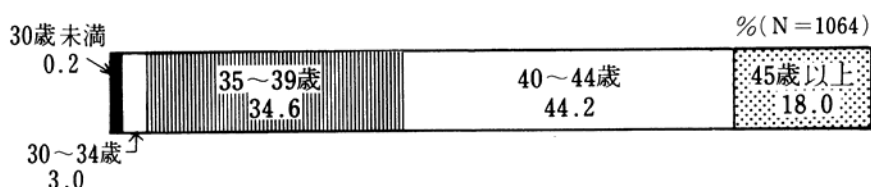
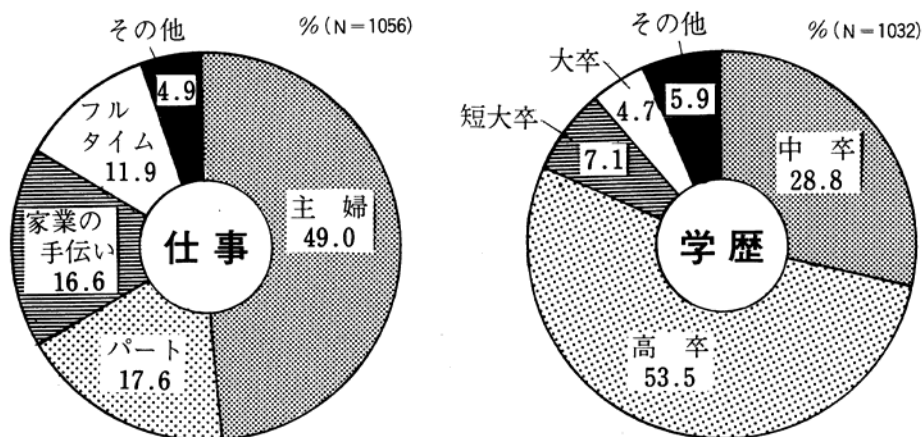


図2 母親の仕事・学歴



学歴は図2に挙げた。中卒者はわずか29%で、一頃の主婦たちと比べると、大幅な学歴の上昇が見い出されるが、大卒（短大も含めて）は12%と、まだそれほど多くはない。

子どもの数は、2人が平均というところで61%だが、3人以上の者も31%と、これまた一頃に比べると、子だくさんを望む傾向が復活してきた感じである。

最後に、サンプルの子どもの年齢は、第一子が30歳から、末っ子が1歳まで、実に幅広く分布している。一概に中学生と言っても、ヨチヨチ歩きのお兄（姉）ちゃんである子どももあれば、すでに結婚したきょうだいを持つ子どもまで、その置かれた立場はさまざまであることがわかる。

## Ⅱ章 自分について

— この人生において自分は価値ある存在なのだろうか —



「中年」とは、われわれに、ヒトの成熟と人生の<sup>おぼ</sup>翳りの両方を想い起こさせる言葉である。現在、まさに中年の坂にさしかかり、またはこの坂を登りつめようとしている（中学生の子どもの）母親たちは、いったい自分をどう見つめ、どう捉え、何を考えながら暮らしているのだろうか。家庭の中での自分の地位と役割に意味と生きがいを見だし、満たされた気持ちで暮らしているといえるのだろうか。

本章では、母親たちのこうした想いを、「家庭内での自分の必要度」「自己の能力」「自己の欠点」という三つの側面から分析してみることにする。

### 1 もし自分が家を不在にすると

家庭は一つの城である。城を築くにはむろん夫婦の協力が必要だが、とりわけ母親は、そのほぼ半生を、この城の構築と発展と維持にささげてきたと言っても過言ではないだろう。しかし、城を築いて少なくとも15年前後を経過した今、いったい母親はその城の女城主として家族からどのように評価されているのだろうか。家族にとって自分は、1日でも家をあけられては困るほど必要度の高い存在なのか、それとも、いなくてもさほど痛痒を感じられない存在なのか——この想いは、時折母親たちの胸に去来するのではなかろうか。

表1は、母親に「自分の不在」という場面を想定させ、家の者がどのくらい困るのかを判断させることで、家族の間における自分の必要度のとらえ方を見ようとしたものである。「毎日の食事の仕たく」から「お金の使い方」までの計11項目について、それぞれ不在「3日間」の場合についての平均値の低い順、つまり自分がいないと困るであろうとする反応が多い順に並べてある。

まず、「あなたが、今、用事で3日間家をあけたとします。残ったご家族は、次のような点でどの程度困ると思いますか。」について見てみよう。

自分がいないと困るものとして筆頭にあげられたものは、当然のことながら「食事の仕たく」と「そうじ、せんたく」である。これらは言うまでもなく、ある意味で主婦業の中心に位置する仕事だが、しかし注目したいのは、これらですら「とても、かなり困る」のは4割強で、残り（ほぼ6割）は、「少し困るがなんとかなる、あまり困らない、全然困らないだろう」と答えられている点だ。昔の主婦は、1日たりとも家を留守にすることがむずかしかった。それは、当時の主婦たちにとっては、大きな不自由であり、束縛と感じられたに違いない。それに比べると、現代の主婦たちは比較にならないほど大きな行動の自由を持っている。しかし、こうした家庭の束縛からの解放は、逆に言えば、「お母さんは不必要」という冷たい宣言に通じる面もあるかもしれない。

第3位から第5位までは、対人関係の担い手としての母親の役割、すなわち、表出的

表1 母親が家をあけると困ること

(%)

項目	3日間家をあけると					1週間家をあけると				
	とても困る	かなり困る	少し困るが何とかなる	あまり困らない	いぜんぜん困らない	とても困る	かなり困る	少し困るが何とかなる	あまり困らない	いぜんぜん困らない
毎日の食事の仕たく	19.6	22.8	38.1	14.2	5.3	37.9	28.7	22.3	8.0	3.1
そうじ・せんたく	17.9	25.3	37.6	13.9	5.3	34.8	29.0	23.9	8.7	3.6
家庭の中がさみしくなる	19.2	24.0	37.1	13.1	6.6	26.6	30.4	28.9	10.2	3.9
お客さまやおつきあい	10.6	14.3	34.9	26.4	13.8	16.4	19.7	30.2	22.2	11.5
子どもの話し相手	7.3	14.6	37.7	25.8	14.6	17.0	26.6	30.1	17.0	9.3
子どもの着るものの世話	9.7	12.5	32.4	26.9	18.5	20.2	23.5	28.6	16.4	11.3
夫の着るものの世話	7.0	7.7	41.3	28.7	15.3	22.0	25.2	28.9	16.0	7.9
子どもの勉強	6.9	10.7	28.6	34.1	19.7	13.4	19.6	29.2	23.8	14.0
動物・植物の世話	7.8	9.9	26.5	30.1	25.7	14.1	14.7	25.2	25.6	20.4
夫の仕事を助けること	11.9	11.1	16.0	24.0	37.0	17.5	14.3	15.5	21.6	31.1
お金の使い方が乱雑に	5.4	9.5	19.9	33.8	31.4	9.6	15.5	23.2	28.6	23.1

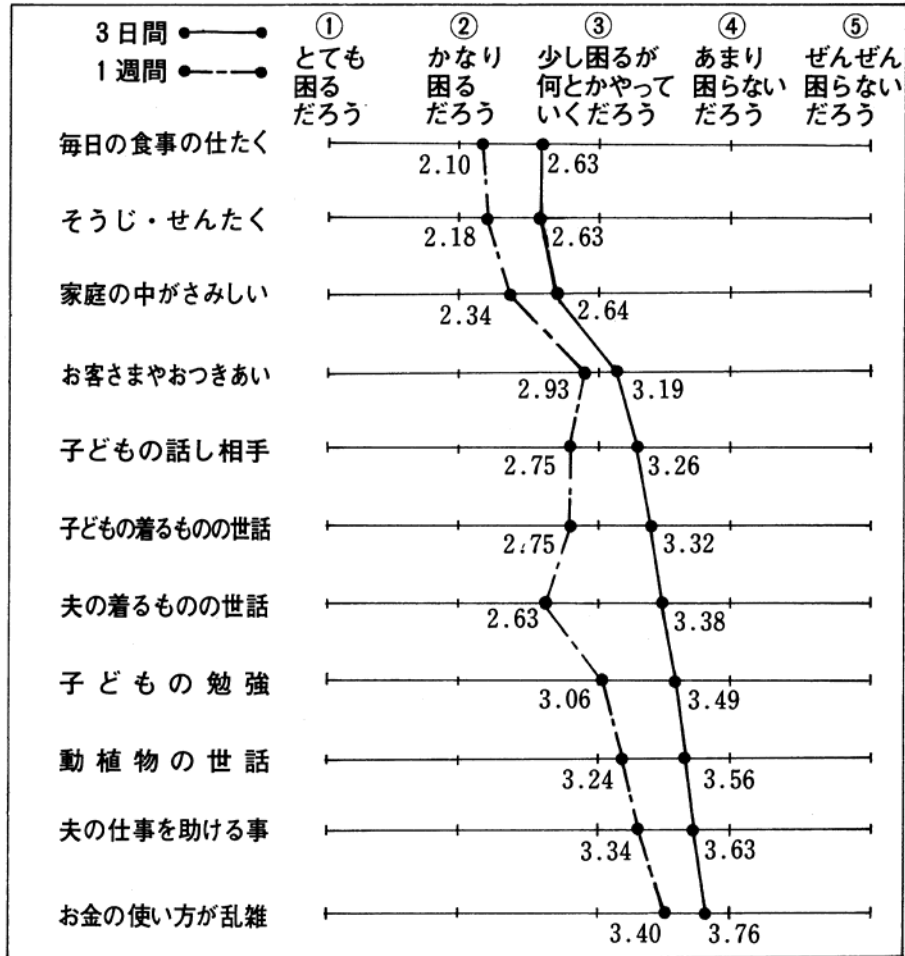
(expressive)な役割への期待である。これらは11項目の中では、「食事の仕たく」「そうじ・せんたく」に次ぐ上位の位置を占めているものの、それでも「いないと困る存在」と自分を評価できた母親は、ほぼ20~40%でしかない。

このように、家事の担い手としての母親への期待はむろんのこと、こうした人間関係の調整役としての母親の役割も、それほどには期待されていないとすれば、母親が家庭内の暮らしの中だけでは生きがいを見いだすことができず、彼女たちの目がともすると外へ向けられがちになるのは、無理もないと言えるだろう。

さて、彼女たちの不在が1週間になったらどうだろうか。表1、図3をみると、困る割合はむろん全体として上昇している。「食事の仕たく」「そうじ・せんたく」が3日間では40%強だったのが、60%強に増えているし、他の項目もほぼ10%くらいずつの増え方である。しかし、それでもなおいちばん困る「毎日の食事の仕たく」ですら33%は「まあなんとかかなる」または、「困らない」と答えているのである。主婦が1週間不在でも、食事の仕たくがなんとかかなる家庭というのは、いったいどんな家庭なのだろう。そこで彼女たちは、毎日どのような役割を演じて暮らしているのだろうか。

2位以下の項目を見ても、4割から7割が「いなくても大丈夫」と答えているのだが、この状況をもう少し明らかにするために、母親の年齢との関係を見ることにしよう。表2が、11のうち5つの項目についての結果(3日間の不在の場合)である。表が示すように、

図3 母親が家をあけると——3日間と1週間の場合(平均値)



母親の年齢が上昇するにつれて、「あまり、ぜんぜん困らない」と答える割合が増えている。これは、おそらく子どもの年齢との関係で生じてくるのであろう。子どもが幼いうちは、家庭の中でなくてはならない存在だった主婦たちが、子どもの成長につれて、自分をさほど必要な存在だとは感じなくなっていく。中年の坂を登りつめるに従って、主婦が自分の人生の意味を問い直すようになるといわれるのは、ここに原因があるのであろう。

表2 家をあけると困る点と年齢の関係 %/N

年 齢	どのくらい困るか	とても・かなり困る	少し困るが何とかなる	あまり・ぜんぜん困らない	計
	年 齢				
子どもの話し相手	35歳未満	46.6	41.7	11.7	100.0/60
	35～39歳	24.3	38.3	37.4	100.0/358
	40～44歳	20.5	39.1	40.4	100.0/440
	45歳以上	18.9	33.7	47.4	100.0/175
子どもの着るもの	35歳未満	36.7	46.6	16.7	100.0/60
	35～39歳	26.9	35.0	38.1	100.0/349
	40～44歳	21.2	31.1	47.7	100.0/434
	45歳以上	16.7	30.5	52.8	100.0/174
夫の着るもの	35歳未満	37.3	39.0	23.7	100.0/59
	35～39歳	18.9	37.7	43.4	100.0/350
	40～44歳	12.3	41.8	45.9	100.0/438
	45歳以上	17.1	45.8	37.1	100.0/63
子どもの勉強	35歳未満	54.3	20.3	25.4	100.0/59
	35～39歳	23.9	25.8	50.3	100.0/356
	40～44歳	15.3	31.4	53.3	100.0/439
	45歳以上	11.9	31.3	56.8	100.0/176
夫の仕事を助ける	35歳未満	43.8	31.6	24.6	100.0/57
	35～39歳	23.9	18.6	57.5	100.0/339
	40～44歳	21.7	13.1	65.2	100.0/406
	45歳以上	22.9	19.1	58.0	100.0/157

## 2 主婦としての能力について

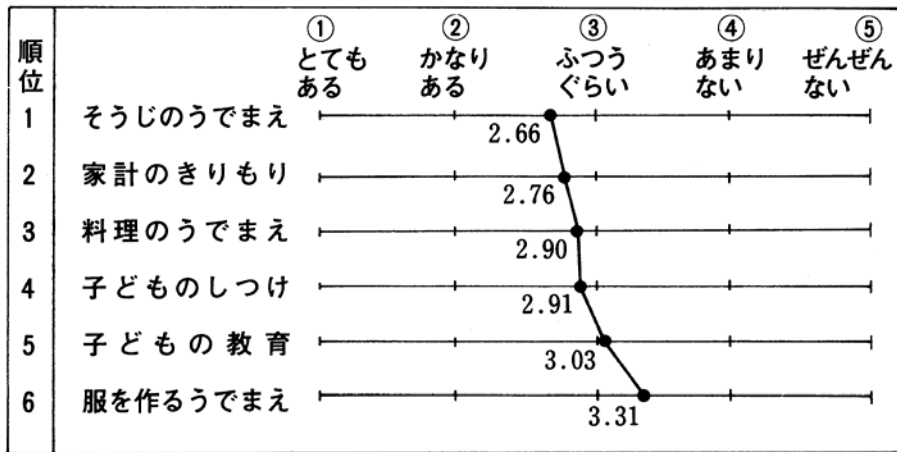
自分が、家族にとって昔ほどには必要な存在だと思えなくなってしまった現代の主婦たち……その心情をもう少し分析してみよう。結婚後少なくとも15年前後を経て、彼女たちは、家庭の中で超有能なベテラン主婦としてうまく家庭を運営し、自分が不在でも家族が困らないだけのシステムを確立することができたのだろうか。だとしたら、家族にとって自分がそれほど必要でないとするのは、大きな仕事をやりとげて、家族を一人ひとり自立させることができたとする一つの自信と成功感の証なのかもしれない。

表3は「母親、または妻としてのあなたを、ご自分で採点なさってください。」という問いで、彼女たちが主婦としての「そうじのうでまえ」から「服を作るうでまえ」までの6項目について、自信を持っている順に並べたものである。6項目の中では、「そうじのうでま

表3 主婦としての自己採点

順位	項目	% / N					計
		とてもある	かなりある	ふつうぐらい	あまりない	ぜんぜんない	
1	そうじのうでまえ	11.1	26.2	50.3	10.1	2.3	100.0/1065
		37.3			12.4		
2	家計のきりもり	8.9	26.0	48.6	12.9	3.6	100.0/1062
		34.9			16.5		
3	料理のうでまえ	5.3	19.9	57.4	14.5	2.9	100.0/1070
		25.2			17.4		
4	子どものしつけ	3.4	16.4	68.0	9.9	2.3	100.0/1064
		19.8			12.2		
5	子どもの教育	2.4	13.4	66.7	14.1	3.4	100.0/1062
		15.8			17.5		
6	服を作るうでまえ	8.5	14.9	29.8	30.4	16.4	100.0/1070
		23.4			46.8		

図4 主婦としての自己採点（平均値）



え」がトップにあげられているが、それでも一応自信があるとする者は、「とても」と「かなり」を加えても4割に満たない。どの項目も「まあふつうだろう」または「あまり・ぜんぜん自信のない」者が、6割から8割に達している。このサンプルの母親たちが、少なくとも15年かそれ以上主婦業に従事してきていることは繰り返し指摘してきたが、この歳月は、何の仕事にせよ一応プロになるための修業としては十分な長さではなかろうか。にもかかわらず、主婦たちのこの自信のなさはどうだろう。掃除人としても、コックとしても、洋裁師としても、教育家としても、もう少しプロとして誇れるような腕をみがき自信を持つことができないのだろうか。

これら主婦としての能力を、学歴との関連で分析してみたのが表4である。高学歴は、主婦としての能力や自信を高める方向に働くのか、それとも逆に作用するのだろうか。

表4は、「とても・かなり」と答えた者の割合に注目して、学歴間での最大値（またはその付近）をゴシックで示したものである。これから明らかなことは、①中卒者は、あらゆる能力において、自信が持てないと答えている。わずかに「そうじのうでまえ」に、多少の自信を示すだけである。②高卒者も、中卒者ほどではないが、やや似た傾向を示す。掃除の能力で、他のグループをややしのぐだけで他は「家計のきりもり」がやや自信あり、といった程度。③大卒者は、家事が概して苦手であるが、「子どもの教育」には他をひき離れた自信をもち、「しつけ」もまあまあ自信を持っている。他のグループに比べて、ひどく苦手なのは「掃除」「家計のきりもり」「服を作るうでまえ」で「料理」は家事の中ではまあ自信のあるものようだ。④いちばん自信のあるのは短大卒グループで、ほとんど



表4 主婦としての自己採点と学歴の関係

					%/N
学歴	うでまえ	とても・かなりある	ふ つ う	あまり・ぜんぜんない	計
	そうじのうでまえ	中 卒	37.0	52.0	
	高 卒	39.5	49.6	10.9	100.0/549
	短大 卒	36.1	52.8	11.1	100.0/ 72
	大 卒	23.4	51.1	25.5	100.0/ 47
家計のきりもり	中 卒	28.0	56.1	15.9	100.0/289
	高 卒	37.2	46.6	16.2	100.0/548
	短大 卒	38.0	43.7	18.3	100.0/ 71
	大 卒	19.1	49.0	31.9	100.0/ 47
料理のうでまえ	中 卒	16.3	58.8	24.9	100.0/293
	高 卒	27.5	59.6	12.9	100.0/549
	短大 卒	43.0	44.5	12.5	100.0/ 72
	大 卒	36.2	44.7	19.1	100.0/ 47
子どものしつけ	中 卒	14.4	69.4	16.2	100.0/290
	高 卒	20.8	68.1	11.1	100.0/548
	短大 卒	28.1	69.1	2.8	100.0/ 71
	大 卒	25.5	66.0	8.5	100.0/ 47
子どもの教育	中 卒	9.0	62.9	28.1	100.0/288
	高 卒	17.4	68.6	14.0	100.0/547
	短大 卒	18.3	77.5	4.2	100.0/ 71
	大 卒	31.9	55.4	12.7	100.0/ 47
服を作るうでまえ	中 卒	19.2	22.0	58.8	100.0/291
	高 卒	25.0	33.5	41.5	100.0/550
	短大 卒	34.7	34.8	30.5	100.0/ 72
	大 卒	14.5	25.0	60.5	100.0/ 48

(注) ゴシックは学歴間の最大値

の項目で、全グループのトップに立っている。この自信はどこからくるものだろうか。高校卒業後、主婦志向の強い者が短大を選択し、職業志向の強い（家事の苦手な）者が4年制大学を選択したのかもしれない。または実際の主婦能力とは関りなく、短大卒業者が、自信があると思込んでいるだけなのかもしれない。とにかく学歴が、一見無関係と思われる主婦能力に、種々のかたちで影響することは、確かなようである。

### 3 自分の欠点

さて、主婦業のプロとしての彼女たちの自信のなさを見たところで、もうひとつ、性格的な面をとりあげよう。人間としての成熟度、魅力という面について彼女たちは自分をどう評価しているのだろうか。これを「欠点」という側面から捉えようとしたのが、表5である。

この表は、「人間には、必ず短所があるものですが、あなたについて短所と思われる点をお聞かせください。」という形で、17の項目について、自分の欠点にあてはまるかどうかを答えさせ肯定率の多いものから順に並べたものである。上位に位置する「感情的」「口やかましい」「神経質」については、「とてもあてはまる」とする者が2割前後。「少し

表5 自分の短所

順位	短 所	% / N			計
		とてもあてはまる	すこしあてはまる	あてはまらない	
1	感情的	22.6	54.8	22.6	100.0/1051
2	口やかましい	19.1	51.5	29.4	100.0/1041
3	神経質	18.9	47.8	33.3	100.0/1058
4	内 気	14.2	43.1	42.7	100.0/1055
5	決断力がない	10.8	42.9	46.3	100.0/1047
6	むだづかいが多い	9.6	38.1	52.3	100.0/1048
7	おしゃべり	10.0	34.4	55.6	100.0/1043
8	口が重い	9.0	35.7	55.3	100.0/1035
9	自分勝手	6.9	38.0	55.1	100.0/1043
10	あきっぽい	5.6	38.9	55.5	100.0/1044
11	ケ チ	6.7	34.2	59.1	100.0/1042
12	だらしがない	5.2	35.9	58.9	100.0/1045
13	どん感	6.5	30.6	62.9	100.0/1036
14	見えっ張り	3.5	29.1	67.4	100.0/1040
15	やる気がない	3.4	25.2	71.4	100.0/1039
16	薄 情	3.1	20.8	76.1	100.0/1022
17	責任感がない	3.4	13.7	82.9	100.0/1033

(注) 順位は肯定率の高い順

あてはまる」を含めると、7割近くが欠点として認めているが、ほぼ5割の肯定率を示すのは次の「内気」「決断力がない」までくらいで、あとはグッと否定率が高まっていく。最も否定率の高い下位項目を拾って解釈すれば、「自分は責任感も強く」「人情に富み」「やる気がある」ということになる。母親たちの性格面での自己評価は、概して自己肯定的で、やや甘い感じがすると言ったら、叱られるだろうか。

もちろん自己肯定的なのは、悪いことではない。自己否定的な人間よりも、全体として精神的に安定し、自信を持って暮らしていることの証拠でもあり、臨床心理学的には望ましい人間像であるとも言えよう。しかしこのような自己肯定は、時にひとりよがり、自己中心的、他人への思いやりを欠いた態度にもつながることがある。広い世間で絶えず他人との接触を余儀なくさせられている父親たちが、こうした自己肯定的評価をしたのだとしたら、それはそのまま素直に受けとっていいだろう。しかし、長い間、家庭というせまい城の中で暮らしてきた母親たちの場合は、この自己肯定的態度はそれほど手放しでは喜べないもののように思われる。この点については、後に夫と子どもについての性格評価の結果のところで、もう少し詳しく考察しよう。

# Ⅲ章 夫について

——夫との関係は満たされたものだろうか——



結婚後、15年余りが過ぎた夫婦。この結婚が成功であったのか、失敗であったのか、各々がそれぞれの回答を出し始めているかもしれない。

結婚してからの女性（主婦）のしあわせは、必ずしも全部が夫に付随する条件や夫との関係で決められるわけではない。しかし、翔ぶことを覚えた現代の主婦たちの場合でも、やはり夫となった人の人柄や、経済力や、職業が、彼女たちの人生のしあわせに、かなり関わっているのは、確かであろう。

この章では、彼女たちが夫について、現在どのくらい満足し、また不満をもって暮らしているかを取り扱っていくことにする。なぜなら、その満足や不満足は彼女たちの子どもに対する欲求や期待の背景として、大きな意味をもつと考えられるからである。夫への不満が、子どもへの過度な教育期待となったり、逆に子どもを自分から「切り離そう」とする態度を生み、それが子どもの問題行動となって表われることは、教育相談の臨床ではしばしば見いだされるからである。

## 1 理想の夫とは

はじめに、彼女たちが一般的に何を夫に期待しているかを探ってみよう。表6は、「もう一度結婚するとしたら、あなたはどんな人と結婚したいですか。」と尋ねた結果である。

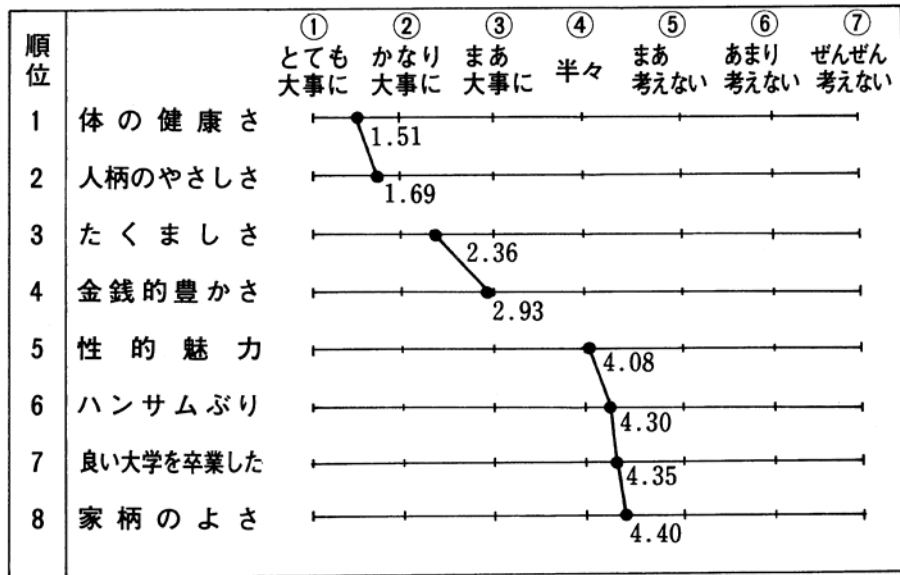
夫の条件として、彼女たちが重要と考えている項目は、全体として三つに分けられるように思われる。まず、8割以上の者が、大切と考えているのは「健康」と「やさしさ」というある意味では極めて平凡で、誰でもが望めば手に入りそうな条件が並んでいる。すべての女性がこうした平凡さを大切と考えるならば、すべての男性は、ある程度これに応え

られそうである。逆に、ほとんど不要と考えられているのが「セックス・アピール」「ハンサム」「高学歴」「よい家柄」で、これは望んでもふつうは手に入りにくいものばかりである。

表6 夫の条件

順位	条件	% / N							計
		とても大事に考える	かなり大事に考える	まあ大事に考える	半分半分	まあ考えない	あまり考えない	ぜんぜん考えない	
1	体の健康さ	70.5	16.2	8.9	2.6	0.5	0.4	0.9	100.0
		86.7					1.8		1058
2	人柄のやさしさ	61.1	19.5	12.7	4.7	0.7	0.6	0.7	100.0
		80.6					2.0		1059
3	たくましさ	37.6	21.3	21.7	12.6	2.8	2.4	1.6	100.0
		58.9					6.8		1038
4	金銭的な豊かさ	18.4	20.8	29.7	20.9	3.4	4.4	2.4	100.0
		39.2					10.2		1038
5	性的な魅力に富む	7.0	6.9	19.6	31.4	14.0	14.9	6.2	100.0
		13.9					35.1		1026
6	ハンサムぶり	4.7	4.5	15.4	36.9	15.6	15.3	7.6	100.0
		9.2					38.5		1041
7	良い大学を卒業した	4.8	7.6	17.2	27.2	14.2	19.0	10.0	100.0
		12.4					43.2		1033
8	家柄のよさ	5.4	6.8	16.2	25.8	17.0	18.0	10.8	100.0
		12.2					45.8		1037

図5 夫の条件 (平均値)



このように表の上位と下位に並べられた項目を眺めていると、人生の厳しい波を夫と共にくぐりぬけてきた中年の主婦たちの、夫を見つめる目の優しきや温かさが伝わってくるようにも思われる。しかしその結論は残念にもちよっぴり早すぎるようである。表の真ん中をご覧いただきたい。「たくましさ」を「とても・かなり」大切とする者59%と「経済力(金銭的な豊かさ)」を「とても・かなり」大切とする者39%は、第5位の「セックス・アピール」以下を大きく離れている。すなわち、上位二つの誰でもが持ち得る平凡な願いのすぐ下には、現代社会に通用する“パワー”の持ち主であってほしいというきつい欲求が、しっかりと根を張っているのである。

## 2 夫の欠点について

では、彼女たちの現実の夫はどんな存在なのだろうか。理想の夫の条件をかなり十分に満たしているか、それとも、不満の大きい存在なのだろうか。ここでは、夫の欠点を指摘させることで、こうした評価を明らかにしてみたい。

表7は、本人の場合と同一項目を使用して、夫の欠点としてあげられたものを肯定率の高い順に並べたものである。

一言で言えば、夫に対する彼女たちの評価は、全体として予想外に好意的であるようだ。表5にあげた自分の欠点の評価と比べてみよう。17項目のうち、12項目で自分より夫に好意的な評価がされている。自分より夫に厳しい評価がされているのは、「口が重い」「自分勝手」「見えっ張り」「薄情」の4項目（他の項目はほぼ等しい）にすぎない。（図6）

図6 短所——自分と夫の比較（平均値）

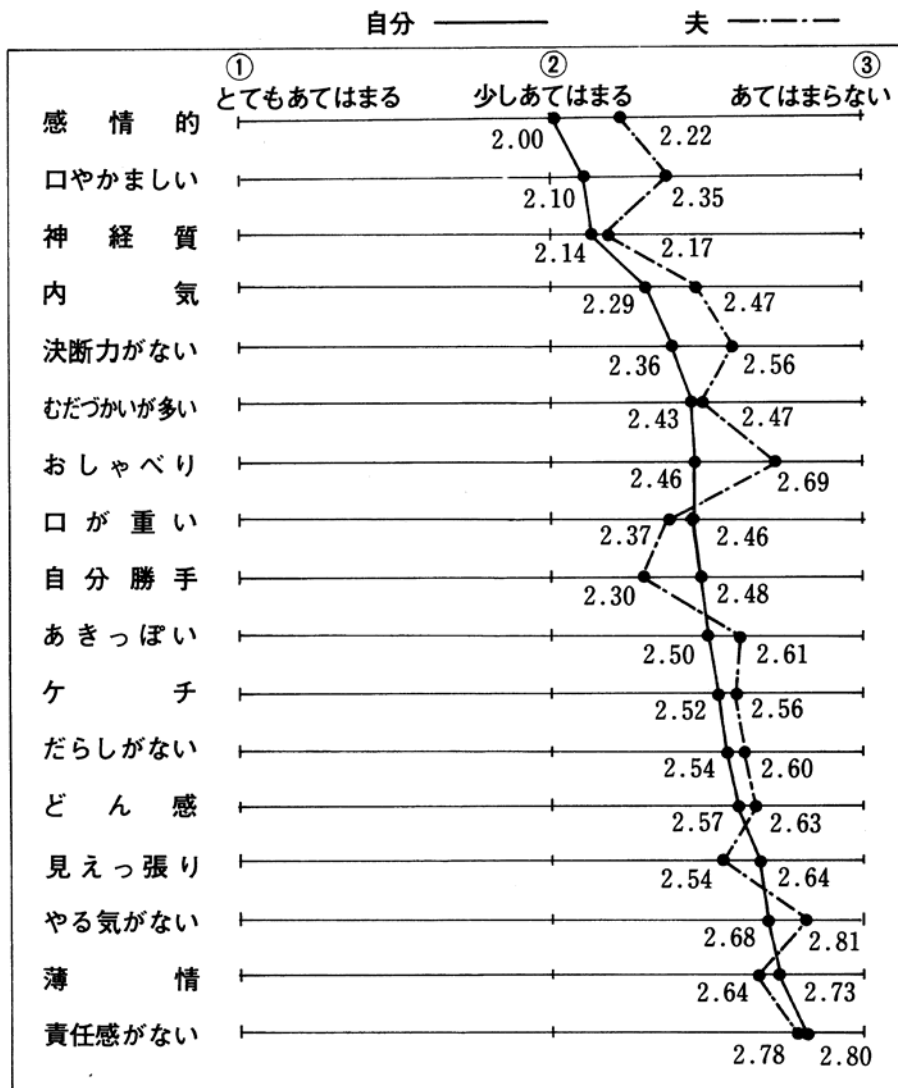


表7 夫の短所

% / N

順位	短 所	とても あてはまる	すこし あてはまる	あてはまら ない	計
1	神経質	19.1	45.2	35.7	100.0 / 1036
2	感情的	19.7	38.8	41.5	100.0 / 1014
3	自分勝手	15.5	38.9	45.6	100.0 / 1031
4	口やかましい	16.5	32.3	51.2	100.0 / 1015
5	口が重い	13.2	36.9	49.9	100.0 / 1014
6	内 気	10.1	32.8	57.1	100.0 / 1004
7	むだづかいが多い	12.7	27.2	60.1	100.0 / 1014
8	見えっ張り	10.3	25.4	64.3	100.0 / 1022
9	ケ チ	7.4	29.4	63.2	100.0 / 1019
10	決断力がない	8.3	27.1	64.6	100.0 / 1024
11	だらしがない	6.2	27.5	66.3	100.0 / 1012
12	あきっぽい	5.3	28.0	66.7	100.0 / 1008
13	どん感	6.5	23.7	69.8	100.0 / 1008
14	薄 情	6.6	22.4	71.0	100.0 / 1004
15	おしゃべり	6.1	18.8	75.1	100.0 / 1013
16	責任感がない	4.3	13.0	82.7	100.0 / 1017
17	やる気がない	3.5	12.1	84.4	100.0 / 1018

注) 順位は肯定率の高い順

次に、夫の欠点として挙げられた項目の順位を眺めてみよう。夫の欠点として最も否定率の高い項目、すなわち下位の項目を拾ってみると「やる気がない」「責任感がない」で、それぞれ84.4%、82.7%の母親から否定されている。

さきに理想の夫の条件で“パワー”への願望の存在を指摘したが、現実の夫で「経済力」や「たくましさ」などの“パワー”を、充分持っているケースは、おそらく少ないと思われる。しかしこの表7に見い出されるように、現実の夫は少なくとも「やる気があり、責任感を持った」たくましい存在のようである。現在彼女たちが望むだけの“パワー”は持っていないとしても、少なくともそれを目指してがんばっている雄々しい姿が夫の姿であり、そのうえに、「情もあり、どん感でもない」（「薄情な」の否定率71.0%、「どん感な」の否定率69.8%）のだから、彼女たちの理想の夫像は、充分には言えないまでも、我慢できる程度には満たされていると解釈することができよう。

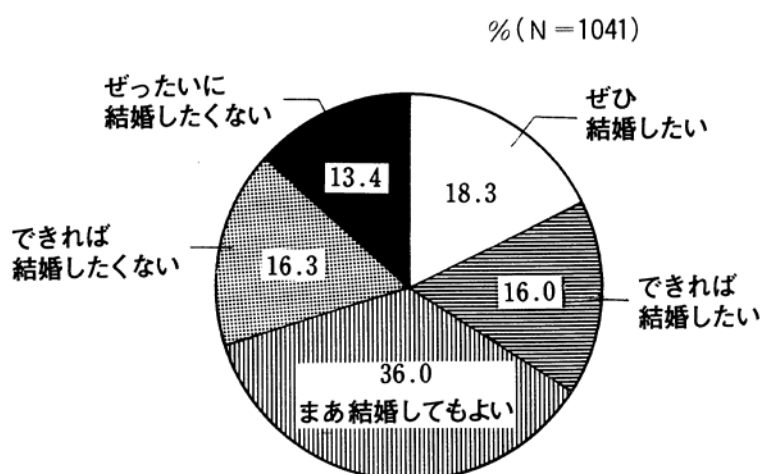
### 3 もう一度結婚するとしたら

このように、夫との関係においては、何やら満たされた感じの主婦たちの姿が浮かび上がってきたように思われるが、この点をさらに「もしあなたのご主人が、また若い青年と

して若いあなたの前に現われたとします。あなたはその青年と結婚してもよいと思いますか。」の問いで確かめてみることにしよう。

図7は、「ぜひ結婚したい」から「絶対に結婚したくない」までの5段階で答えを求めた結果である。「ぜひ結婚したい」及び「できれば結婚したい」という熱愛型は、さすがに34%だが、「まあ結婚してもよい」までを含めると、ほぼ7割の者が夫に満足していることになる。これまで浮かび上がってきた夫との関係において、ほぼしあわせそうな彼女たちのイメージは、この問いでも確かめられたことになろう。

図7 夫ともう一度結婚したいか



しかし、この図で見落としてならないのは、他の3割。すなわち「できれば結婚したくない」(16.3%)、「絶対に結婚したくない」(13.4%)妻たちの存在であろう。この層がどんな条件におかれた層なのか、次にこの層の分析をすすめよう。

まず考えられることは、夫の性格や頭脳の問題である。よい性格とよい頭脳に恵まれた夫に対しては、たぶん好意的な感情を抱き続けられるだろう。ここでは「子どもの勉強を何年生まで見てやれる自信があるか」の項目を利用して、夫の頭脳のレベル（または教育レベル）との関連を分析してみた。表8がそれである。数学についてみると、いずれも学力のある夫（頭のよい夫）とは、再び結婚したい者が多くなっている。表に示したように「今も子どもの数学を見てやれる（頭のよい）夫」とは79%が結婚してもよいと答え、小学校5・6年の学力の夫とは73%、小学校3・4年以下のいわば頭のよくない夫では、60%程度しか希望者がいない。

次に自分の仕事（専業主婦かどうか）との関連（表8）を見よう。専業主婦はなぜか生まれ変わっても夫との結婚をもっとも望み（78%）自営業やパートで働きに出ている主婦たちは、最も希望者が少なく（63%、66%）、フルタイム就業者はその中間となっている（69%）。

また、これら以上に顕著に関連をもつ条件は、「子どもの性格」や「頭脳の良し悪し」のように思われる。表8に挙げたように、子どもの頭が「よい」と考えるグループでは、生まれ変わったとしても夫との結婚を望む者78%、子どもの頭が「ふつう」のグループでは73%、「よくない」グループでは60%と順次低下している。さらに「性格」（表8）についても同様で、子どもの性格が「よい」グループでは77%、「ふつう」では68%、「よくない」グループでは60%となっている。

表8 夫ともう一度結婚したい気持ちとの関係項目

%/N

夫との結婚 項目		ぜひ・できれば・まあ 結婚したい	できれば・ぜったい 結婚したくない	計
夫の 数学の 学力	小学校1・2年	64.5	35.5	100.0 31
	3・4年	58.8	41.2	100.0 136
	5・6年	73.2	26.8	100.0 425
	今も自信がある	79.0	21.0	100.0 334
夫の 理科の 学力	小学校1・2年	64.7	35.3	100.0 51
	3・4年	61.8	38.2	100.0 136
	5・6年	73.0	27.0	100.0 434
	今も自信がある	79.5	20.5	100.0 317
仕 事	主婦	78.3	21.7	100.0 483
	パート	66.3	33.7	100.0 190
	フルタイム	68.5	31.5	100.0 127
	家業	63.2	36.8	100.0 163
子供 の頭 のよ さ	とても・かなり よい	77.8	22.2	100.0 207
	ふつう	72.9	27.1	100.0 643
	あまり・ぜんぜん よくない	59.5	40.5	100.0 173
子供 の性 格	とても・かなり よい	77.4	22.6	100.0 385
	ふつう	68.1	31.9	100.0 583
	あまり・ぜんぜん よくない	60.0	40.0	100.0 50

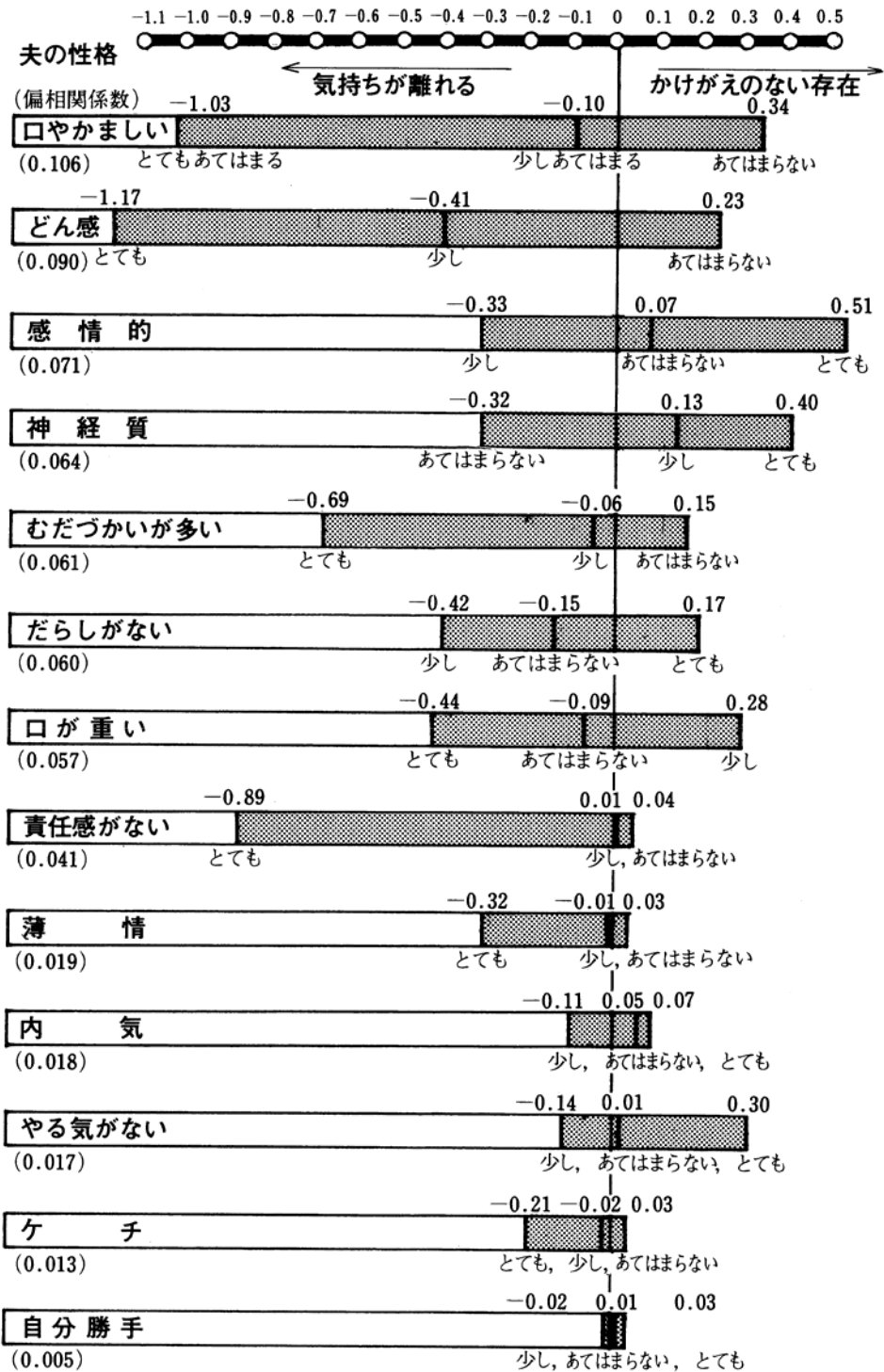
以上から指摘されることは、夫との結婚が成功だったのか失敗だったかの評価は、むしろ  
ん当事者どうしの条件（たとえば夫の教育レベルや経済力や職業）に依存する面もあるが  
それに加えて子どもの条件、すなわちある意味では、結婚生活の最大の所産であるところ  
の子どものでき、不でき——つまり子どもが優秀か、ふつうか、並以下かによってもかなり  
大きく影響されるものようである。「子はかすがい」とは昔の人の言葉だが、現代は、  
ただ子どもがいるだけではかすがいの用をなさず「よい子」「優秀な子」だけがかすがい  
の役を果たすことができるもののように思われる。



# 4 夫との将来

さてこのように、いくぶんかの人々は夫との結婚生活に後悔をし不満も持っているようだが、とにかくほぼ7割は夫に及第点を与えていることがわかってきた。では、現在とは

図8 60歳時の夫との関係を左右する要因(カテゴリー・スコア)



もかく将来は、夫と円満でしあわせな老後を迎えることができると予想しているのだろうか。表9は、60歳になった時の夫との関係の予想である。

表9 60歳時の夫との関係

% (N=1005)

	①	②	③		⑤	平均値
60歳時の夫との関係	今より一段とお互いかけがえのない存在	今よりも少しお互いかけがえのない存在	今と同じくらい	今より少し気持ちが通じにくい存在	かなり気持ちが離れてしまう	
	36.6	19.0	38.5	2.2	3.7	2.17
	94.1			5.9		

今よりも気持ちが通じにくくなっているだろうとする者は、わずかに、5.9%。他は少なくとも現状維持(38.5%)か、もっとお互いかけがえのない存在としてしあわせな老後を送れそうだと考えている(55.6%)ことが見いだせる。

しかし、こうした「よりよい関係」を予想できる夫と、そうでない夫のもつ条件はどんなものだろうか。これを夫の「性格」との関連で分析するために、数量化II類を用いて、多変量解析を試みた。「60歳の時の夫との関係」を規定するアイテム(要因)の偏相関係数を示し、更に促進要因と阻害要因についてのカテゴリースコアを図示したのが、図8である。図が示すように、夫の性格特性のうち、「老後の夫婦の関係」に大きな説明力をもつのは、偏相関係数の大きなもので、夫の「口やかましい」「どん感な」「感情的な」「神経質な」のような特性である。特に図8をみると、夫が「どん感」であったり、「口やかましい」と将来の関係がうまくいかない可能性が予期され、逆にうまくいきそうな予測のできる夫の特性は、ややデリケート(悪く表現すれば神経質)で、感情の豊かな(悪く表現すれば感情的な)タイプ、ということになるだろうか。つまり、繊細で人間性豊かであっても口やかましくなく、自分を拘束しないタイプの夫と、うまく結婚生活を持続できそうだと彼女たちは考えているらしい。

# IV章 子どもについて

— その現状と未来への展望 —



子どもは残酷な動物だ。母親の人生を半分食べて育つ鬼っ子だ。しかも、母親の人生のいちばんおいしい部分を、情け容赦もなく食べ尽くす。子どもは母親の献身と犠牲がなければ育たないやっかいな存在である。しかし、母親たちは誰もそれを自己犠牲の道程だとは思わない。母親は子どもの上に無限の夢と望みを託し、自分の新生が少しずつ現実のものとなっていく喜びに、胸をおどらせる。

ところが、いつの間にか中学生になってしまった子どもたちを目の前にして、多くの母親たちはふとわれに返る。母親なしには一日も過ごせなかった幼い頃は、いつの間にか、遙か昔のことになってしまった。近頃では母親を必要としないどころか、母親の影響下からできるだけ離れようとする素振りを見せることすらある。それにどうやらわが子のでき上がり具合は、昔、自分が願っていたものとはどうも少し違うようである。母親はふと自分に問い直すことがあるかもしれない。いったい自分の人生は何だったのか……と。

本章では、母親の人生の中で、最も大きなウエイトを占めるものの一つである「子ども」を通して、母親の心情の分析を行ってみようと思う。

## 1 まず全体に

中学生になった子どもに対して、母親たちは全体として、どんな評価をしているだろうか。おおむね満足なのか、それとも不満足か。いったい自分の献身は、果たして報いられたのだろうか。これを「性格」「頭のよさ」「成績」の三つに分けて評価を求めた。

表10は「性格」と「頭のよさ」について、5段階（とてもよい～ぜんぜんよくない）で評価させた結果である。このうち、「性格」については、最も肯定的で、「あまり・ぜん

ぜんよくない」とする者は、わずかに3.8%，96.2%がふつうかそれ以上，と答えている。人の性格が、ほぼ育て方や家庭環境で作られるものとすれば、母親たちの献身は、ここにある程度実を結んだともいえるであろう。

次に「頭のよさ」はどうだろうか。これはおもしろいことに、5段階の中央（ふつう）に64.5%が集中し、よい方にもわるい方にもほぼ等しい分布となっている。頭のよさがほぼ生来的なものだとすれば、母親たちは子どもたちを客観的に冷静に捉えていると言ってもいいかもしれない。それにしても、我が子の頭脳を「とてもよい」と思えるのは2.3%，クラス（50人の場合）にほぼ1人。「かなりよい」と思えるのは、15.1%，クラスで7人という数字は、かなり厳しいものである。多くの母親たちは、能力にはそれほど恵まれているとも思えないわが子を、叱咤激励して、勉強させているわけである。

さて、成績に関してはどうだろう。図9は、子どもの成績についての6段階評価の結果であるが、この数字は正規分布にほぼ近く、母親たちが我が子の現実の学力を非常に客観的に捉えていることを示している。しかし、違う言い方をすれば、これは非常に恐ろしい数字でもある。中学生の子どもの成績を、母親がこれほど正確に知覚しているという状況。親としての身びいきも許されず、無関心も許されない状況。これは学力競争の徹底と、それに対する親たちの過度の介入を示す数字だとも言えるのではなからうか。

この中で、子どもの成績にほぼ満足できる層は、クラスで10番ぐらいまでの層ではなからうか。とすると、ほぼ3割の母親はまあまあ満足しているが、残り7割の母親は、大なり小なりの不満を持っているとみなしてよいだろう。

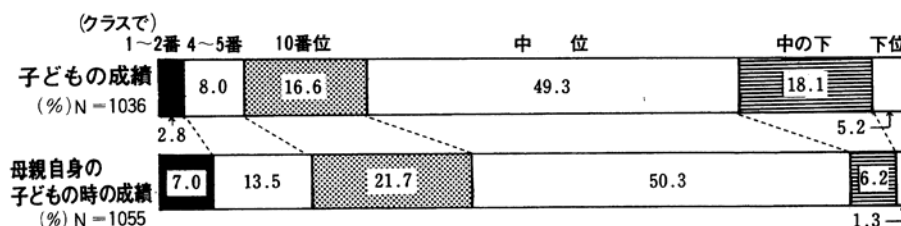
ちなみに、母親の中学生時代の成績を尋ねてみた結果も図9に並べておいた。これは正規分布よりもかなりよい方に偏っている。「10番位まで」が42.2%、「ふつう」が50.3%，すなわち、ふつうかそれ以上が92.5%というものすごい数字である。ふつうより悪かったと答えた者は、わずか7.5%にすぎない。これはむろん彼女たちの自己過大評価であって真の

表10 子どもの評価

%/N

	とてもよい	かなりよい	ふ つ う	あまりよくない	ぜんぜんよくない	計
性 格	11.7	25.9	58.6	3.2	0.6	100.0/1106
頭のよさ	2.3	15.1	64.5	16.1	2.0	100.0/1099

図9 子どもの成績と母親自身の成績



姿ではない。しかし、多くの母親たちが、わが身とひき比べて子どもを「自分ほどはできない」とか「駄目な子だ」と評価し不満を持っている様子がよくわかる。

ともあれ、中学生を持つ母親にとって、目下のいちばん大きな心配や不満は、どうやら子どもの学力・成績であるらしいことがわかってきた。そこでこの点について、更にデータの分析をすすめよう。

表11、表12は、子どもの勉強の方法と、もっと成績をよくするにはどうしたらよいと思うか、のデータである。まず、勉強の方法（表11）についての結果を見ると、学習塾に行っている者は45%だが独力でやっている者もそれと同程度である。家庭教師についている

者は、意外に少ない。

次に「もっと成績を上げるにはどうしたらよいか」を母親たちに尋ねた結果が、表12である。「ドリルや参考書をもっと買い与える」方法は、「効果がないだろう」とする者が

表11 勉強の方法

%(N=1113)

勉強の方法	そうしている	そうしていない
学習塾で	45.4	54.6
独力で	45.2	54.8
通信教育で	13.7	86.3
家庭教師で	4.9	95.1

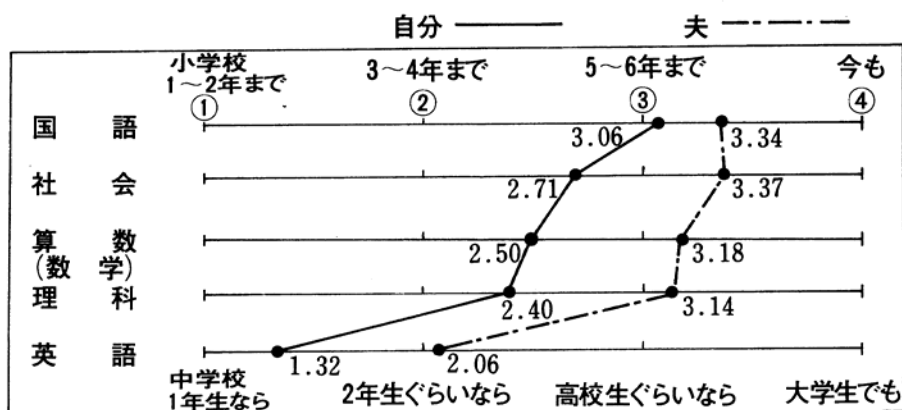
表12 もっと成績をよくするには

%/N

よくする方法	ぐんとよくなる	かなりよくなる	まあよくなる	変わらない	むしろ悪くなる	計
家庭教師を	7.7	24.1	38.5	27.6	2.1	100.0/924
学習塾を	2.3	15.3	38.4	39.5	4.5	100.0/929
通信教育を	0.8	8.9	34.6	53.8	1.9	100.0/913
ドリルや参考書を	2.0	7.5	31.4	56.3	2.8	100.0/959

「変わらない」と「むしろ悪くなる」を合わせると59%を越えている。「学習塾へ通うか、回数を増やす」方法は、44%が「変わらない」か、「むしろ悪くなる」と答えている。いちばん期待をもたれているのが、「家庭教師」のようだ。成績が「かなりよくなる」だろうと答えている者は、「ぐんとよくなる」と合わせて、32%にも達し、「まあよくなる」を合わせると、70%がその効果を多少なりとも信じている。いわば、集団を相手の学習システムでは、大した効果の上がらないことを一応経験済みで、残りはマンツーマン方式、個人教授に期待をかけているといったところだろうか。家庭教師をやっている家は、わず

図10 質問された時に答える自信は(平均値)



か5%なのだが、だとしたら、これは主として、経済的理由から実行されていないのであろう。

マンツーマン方式のうち、最も現実的な方法は、父親や母親が家庭教師の代わりに教えることである。この点についての自信を尋ねたのが、図10と表13である。自分より夫の学力が信頼されている傾向にあるが、自分については、英語が「中1」まで、国語・社会が5・6年生まで、数学・理科が3・4年生までとする母親が多い。「現在も教えることに自信がある」と答えている母親は、国語30%、やや落ちて社会13%、ぐっと下がって数学7%、理科5%という数字である。

表13 質問された時に答える自信は %/N

		小学校 1・2年まで	3・4年まで	5・6年まで	今も自信あり	計
国語	自分	2.8	17.6	50.1	29.5	100.0/1087
	夫	2.2	10.0	39.4	48.4	100.0/ 994
社会	自分	4.2	33.6	49.0	13.2	100.0/1073
	夫	2.3	9.1	38.1	50.5	100.0/ 990
算数 (数学)	自分	5.5	46.4	41.2	6.9	100.0/1077
	夫	2.2	14.6	46.3	36.9	100.0/ 988
理科	自分	8.2	48.7	38.3	4.8	100.0/1077
	夫	3.2	14.5	47.5	34.8	100.0/ 988
		中学1年生なら	2年生ぐらいなら	高校生ぐらいなら	大学生でもよい	計
英語	自分	77.0	16.4	4.2	2.4	100.0/ 793
	夫	42.6	22.7	21.4	13.3	100.0/ 824

## 2 子どものがんばり方

性格はよいが、頭脳はまあまあ、成績については、自分の子ども時代よりもパツとせず、7割が大なり小なりの不満というのが子どもへの評価である。しかし、自分では勉強をみる自信がないし、塾や参考書で成績をアップすることは、それほど期待できそうもない。といって、家庭教師につくのは費用がかかる——となると残るのは、「がんばれば」「努力すれば」という、一種の精神主義であろう。この点について、母親たちの態度を見てみよう。

表14・表15・図11は、子どもの成績の最近の傾向と、勉強でがんばっているかどうか、もっとがんばればどのくらいになれるかを聞いたものである。まず表15だが、子どもが勉強を「とても・かなりがんばっている」と回答した者は、20%であり、「ややがんばっている」を合わせると52%が、大なり小なり「がんばっている」ことを認めている。この数字にどういう感想を持つかは、人によって違うだろうが、今の子どもたちが、かなりよくがんばっており、それを母親たちも内心は「今の子どもは、本当によく勉強してえらいものだ」と感心している様子が伝わってくるようにも思われる。

しかし、「よくがんばる」という見方が、すなわち子どもの成績に満足している、とか、がんばりぶりに満足しているということを表わすわけではないのは、いうまでもない。

「あまりがんばっていない～とても怠けている」とみる母親26%の不満が、大きいのは無論だろうが、「ふつう」と答えた22%の母親も当然不満があるだろう。また「ややがんばっている」とみる母親33%も、逆に言えば「もっとがんばれるはず」となるだろう。も

表14 子どもの成績の最近の傾向

%(N=1038)

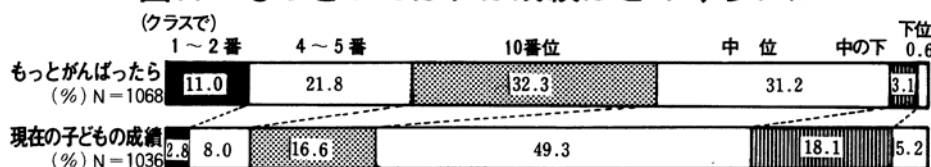
1 上昇ぎみ	2 だいたい同じ	3 下りぎみ	平均値
22.7	58.7	18.6	1.96

表15 子どもは勉強をがんばっているか

%(N=1100)

1 とてもがんばっている	2 かなりがんばっている	3 ややがんばっている	4 ふつう	5 あまりがんばっていない	6 ほとんどがんばっていない	7 とてもまけている	平均値
4.2	15.3	32.9	21.7	20.1	3.8	2.0	3.58

図11 もっとがんばれば成績はどのくらいに



ともがんばるといえるのは、モーレツにがんばることを指し、すこしががんばるのでは、がんばりが不足ということになるのであるから。とすると、子どものがんばりぶりに満足している母親は約20%、やや不満な層が54%、大いに不満な層が26%ということだろうか。

さて、このようながんばりの効果、すなわち「努力」の力を母親は、どのくらい信仰しているだろうか。図11は「お子さんがもし今もっとがんばればクラスでどのくらいの成績がとれると思いますか」と尋ねた結果である。努力すれば10番までに入れるはずだと思っている母親は、ほぼ65%に達している。単純に計算すれば、10番以内は20%であるから、45%の母親が、子どもを過大評価していることになる。さきほどの、子どもの成績評価に示された客観的な眼は、どこへ行ってしまったのだろうか。

### 3 子どもの欠点

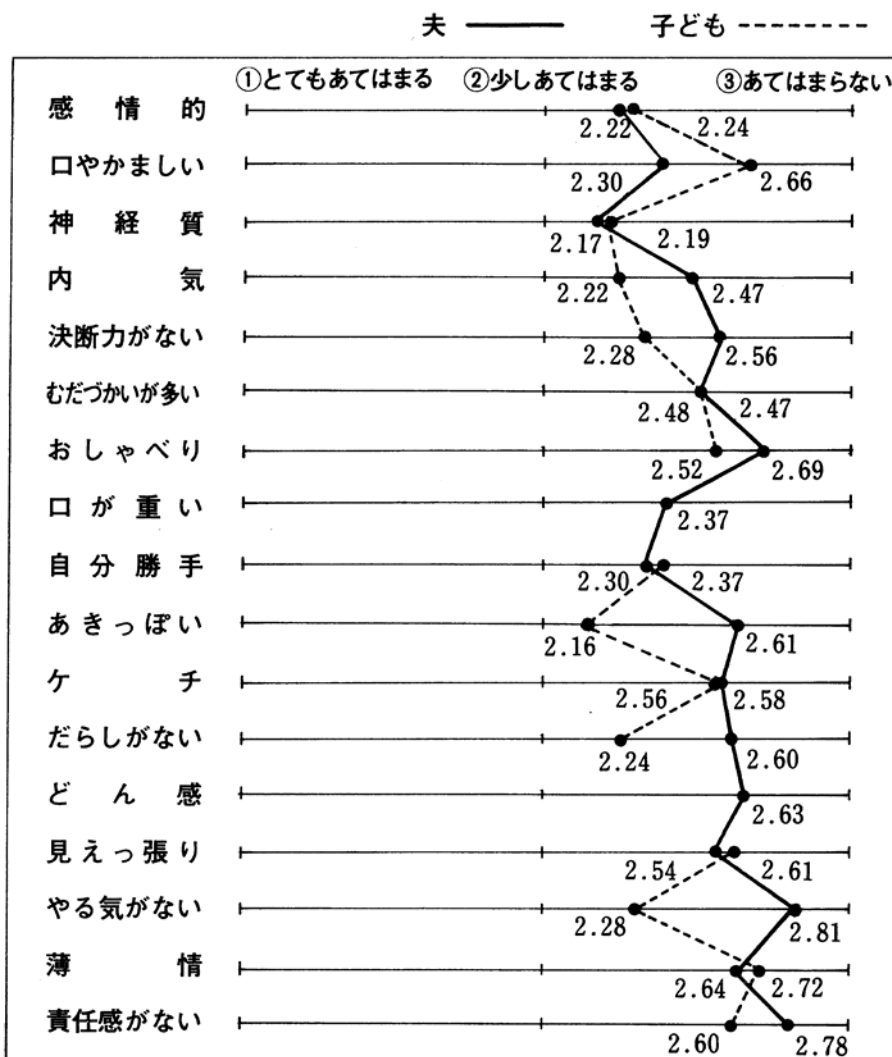
ここで、母親と父親にひき続き子どもたちについての性格評価のデータを拾ってみよう。夫に対しては、全体としてかなり満足度が高かった彼女たちだが、子どもについてはどうだろうか。

子どもとおとなの性格評価には必ずしも同じ項目が使えない部分もあるので、用いられた項目は、24項目。その内訳は、子ども用に新たにつけ加えられたのが、「テンポが遅い」「頭が悪い」「素直でない」「乱暴」「理屈っぽい」「反抗的」「落ち着きがない」「正義感がない」「言葉づかいが悪い」の9項目、他はおとな用の17項目中「どん感」「口が重い」を除いた15項目を使用してある。

結果のうち一部を、父親と対比させたのが図12である。父親と比較すると、全体に評価が辛いのが特徴である。共通に使用した15項目のうち、はっきりと子どもの評価の方がよいのは、「口やかまし(くない)」項目にすぎない。夫より子どもに見いだされた不満は、「内気」「決断力がない」「おしゃべり」「あきっぽい」「だらしがない」「やる気がない」「責任感がない」の7項目で、その中でも、「内気」「決断力がない」「あきっぽい」「だらしがない」「やる気がない」が強調されている。これらはさきに子どもの「性格はまあまあ」だが「勉強のがんばり不足」とする母親の見方をよく表わしている。すなわちアンダーラインの形容詞は、すべて勉強に向かう努力の不足を示す特性のように思われる。

子どもの欠点の指摘と関わりを持つと思われるデータが、表17である。「子どもが勉強にがんばっているか」との関連を見てみよう。子どもが勉強をがんばっていると評価してい

図12 夫と子どもの短所(平均値)



る母親は、がんばり不足だと思っている母親より、子どもの性格をよいと考えている。すなわち、「とても・かなりがんばっている」子どもの欠点の平均点は、(表17のように子どもに対する性格評価を点数で表わすと)11点、「ややがんばっている」12点、「ふつう」14点、「あまり・ぜんぜんがんばっていない」子どもに対しては、18点となっている。平均点が高いほど、欠点の指摘が厳しいことを表わす。但し、がんばって勉強しない子に、ほんとうに性格上の欠点が多いのか、それとも努力して勉強しない子どもには、母親の見方が、全体としてネガティブになるのか——この点はこのデータだけでははっきりしない。

ついでに欠点に関する残りのデータを説明してしまおう。「子どもの性格」との関連では、当然のことだが、性格を「よい」としたほうが欠点のあげ方が少ない。次に面白いのは、「母親の年齢」との関連で、若い母親の方が、年配の母親より欠点の指摘が多い。年をとると人間に対して寛容さが増すのだろうか。35歳未満の母親が21点(子どもの欠点の指摘)なのに対して、45歳以上は、半分の11点でしかない。また母親の昔の成績とも多少の関係があるようである。成績のよかった母親が子どもを「上手」にしつけることができたのだろうか。

さてもとに戻って、母親たちはそうした子どもの欠点——とくに彼女たちが、子どもの



表16 子どもの短所

%/N

順位	短所	とてもあてはまる	すこしあてはまる	あてはまらない	計
1	あきっぱい	17.3	49.6	33.1	100.0/1062
2	神経質	16.3	48.2	35.5	100.0/1060
3	内気	17.7	42.9	39.4	100.0/1064
4	テンポがおそい	17.6	42.5	39.9	100.0/1060
5	感情的	14.5	47.0	38.5	100.0/1045
6	だらしがない	14.1	47.8	38.1	100.0/1060
7	決断力がない	11.8	48.7	39.5	100.0/1050
8	やる気がない	12.7	46.8	40.5	100.0/1058
9	反抗的	9.9	46.8	43.3	100.0/1050
10	自分勝手	11.4	40.0	48.6	100.0/1047
11	言葉づかいが悪い	9.7	41.4	48.9	100.0/1053
12	落ちつきがない	11.1	38.6	50.3	100.0/1055
13	理屈っぽい	10.3	38.5	51.2	100.0/1047
14	むだづかいが多い	11.1	29.9	59.0	100.0/1054
15	頭が悪い	6.8	35.3	57.9	100.0/1031
16	おしゃべり	8.4	30.8	60.8	100.0/1053
17	素直でない	5.4	31.6	63.0	100.0/1043
18	ケチ	7.3	27.3	65.4	100.0/1046
19	責任感がない	5.4	29.6	65.0	100.0/1050
20	見えっ張り	5.6	27.4	67.0	100.0/1045
21	口やかましい	5.9	22.4	71.7	100.0/1047
22	正義感がない	3.7	22.2	74.1	100.0/1039
23	薄情	2.6	23.0	74.4	100.0/1032
24	乱暴	3.5	17.5	79.0	100.0/1046

(注) 順位は肯定率の高い順

表17 子どもの短所をめぐって

(平均点)

勉強をがんばっているか	とても・かなり	11.12	母親の年齢	35歳未満	21.00
	やや	12.24		35～39歳	13.99
	ふつう	13.83		40～44歳	13.55
	あまり・ぜんぜん	17.63		45歳以上	11.38
子どもの性格	とてもよい	8.39	母親の昔の成績	1～2番	12.01
	かなりよい	11.86		4～5番	13.32
	ふつう	14.58		10番くらい	13.78
	あまり・ぜんぜんよくない	21.70		中位	13.92
				中の下以下	18.12

(注) 24項目の平均点… とてもあてはまる……2点  
 すこしあてはまる……1点  
 あてはまらない……0点  
 として算出

パワーのなさ、やる気のなさを気にしていることはすでに述べたが——を、どこに起因するものと考えているのだろうか。表18は、母親たちの考える欠点の原因である。これは、子どもの持つ最大の短所について、尋ねたもので、表が示すように、第1位が、「親のしつけの失敗」で、63%がこれを肯定している。第2位以下は、遺伝的な負因の推定、すなわちある意味ではしつけの失敗を否定し、他に責任転嫁する態度である。こうした責任転嫁は、よく問題児をかかえた夫婦の間でもち上がるメカニズムである。すなわち、自分を、問題の子どもができあがった原因の一部として、認めることを拒否するメカニズムで、夫や祖父母のしつけのあり方や、遺伝的負因の中にその原因を見い出そうとする。これは臨床医学では、「切り離し」という言葉で表現される。しかし本調査の母親たちには、切り離しのメカニズムはむしろわずかで、逆に自責的である点が特徴かもしれない。遺伝的負因との関りあいに逃げようとした場合でも「全く」「少し」を合わせて「夫に似た」は37.4%、「自分に似てしまった」51.4%と、むしろ自分の方に罪をひき受けようとする態度の存在が顕著である。夫に対する形を変えた攻撃は、予想外に少ないことが見い出される。

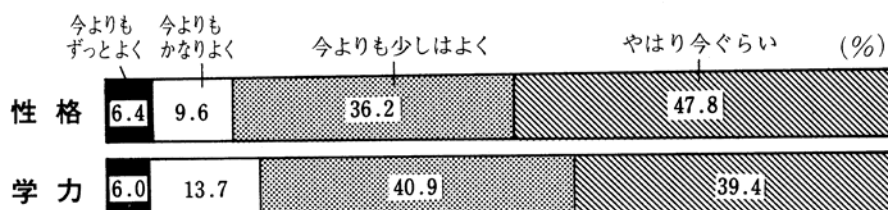
表18 子どもの最大の短所はなぜできたのか %/N

原因	全くそのとおり	すこしそのとおり	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
親の育て方の失敗	20.6	42.7	21.9	14.8	100.0/906
自分に似た	13.3	38.1	27.7	20.9	100.0/895
夫に似た	6.1	31.3	34.4	28.2	100.0/864
父方の祖父母	2.9	15.1	34.9	47.1	100.0/827
母方の祖父母	1.7	11.6	35.4	51.3	100.0/819
祖父母のしつけ	1.4	6.9	23.9	67.8	100.0/777

## 4 もう一度育て直すとしたら

では、子育てをふりだしからやり直したら、どうだろうか。もし母親としてのこれまでのしつけに後悔が多く、失敗したという感情を強く持っていたとすれば「もう一度やり直せば、今度こそは、自分の理想に近い、素晴らしい子どもができるに違いない」という反応が出てくるはずである。図13をご覧ください。「今よりずっとよくなる」「かなりよくなる」だろうと答えた母親は、意外に少ない。性格で、16.0%、学力で、19.7%でしかない。全体として、「少しはよくなるかもしれないが、やはり今くらいの子どもだろう」という見方が圧倒的である。とにかく親としては、ギリギリ、ベストを尽くしたという感じなのであろう。無論、部分的には、多少の失敗もあるかもしれないが、それが「今より

図13 もう一度育てれば

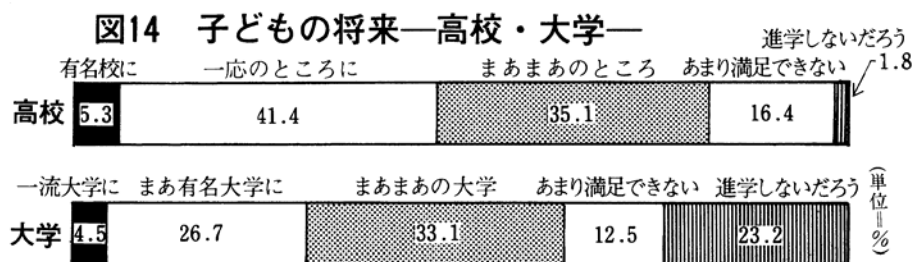


少しはよくなる」の36.2%（性格），40.9%（学力）というところだろうか。とにかく多くの母親たちは、それほど大きなしつけの失敗はしてこなかったと思っているようである。

しかし、性格と学力とを比較すると、やはり学力のつけさせ方に失敗を認める母親が多い。やれるだけのことをやった、と考えている（「育て直しても、やはり今ぐらいだろう」とする者）のは、性格については、47.8%だが、学力については、39.4%である。60.6%の母親は、やり方によってはもう少し学力も何とかなっただと考えているようだ。

## 5 子どもの将来

さてここで、目を子どもの将来へ向けてみよう。子育てはこれまでできるだけがんばってやってきた。無論、部分的な失敗はあるがそれほど大きなミスはしなかった。学力的には、もっとがんばれば成績も上がるはずで、その点で、子どもの現在の学力に不満はあるが、性格的にはまあまあだ。——と、こんな心境の母親像が、これまでのデータから拾い出された平均像である。では、今後はどうなのか。子どもたちの将来について母親たちは、どんな見通しを持っているのか。明るい未来か、灰色の将来か。子どもの将来を、高校—大学—人生といったライフスパン（将来の見通し）の中で予想してもらったのが図14、15、16である。



**表19 高校予想と大学予想の関連**

%/N

大学	一流大学に	まあ有名大学に	まあまあ大学	あまり満足できない	進学しないだろう	計
高校 有名校に	50.0	42.2	3.1	1.6	3.1	100.0/64
一応のところ	3.7	53.5	29.6	2.8	10.4	100.0/432
まあまあ	0.5	7.8	54.2	11.8	25.7	100.0/373
あまり満足できない	0.6	0.6	13.8	42.5	42.5	100.0/174

まず、いちばん近い将来である高校について「有名校に入れるだろう」という極めて明るい見通しを持っている層は、ごくわずかで5.3%にすぎないが、「一応のところ」が、41.4%、「まあまあ」（我慢できる程度）のところは35.1%と、高校入学の見通しは思ったほど暗くないようだ。「あまり満足できないところにしか入れないだろう」という、悲観した見通しは、16.4%でしかない。

では大学はどうか（図14）。まずここでも一流大学に、という見通しはほぼ4.5%でしかないが、さきの「有名高校」への見通し、5.3%と似た数字を示していることが面白い。つまり子どもの学校について極めて明るい将来を予想できる母親は、5%にすぎないということだろう。

さて次に、高校と大学の入学の予想について、相互の関連を見てみよう（表19）。近い将来である高校入学において「有名高校に入れよう」と期待している層のうち、半分（50%）は「一流大学」への進学を、残り（42.2%）も、「まあ有名大学」へ入れると予想している。つまり、この5%の子どもたちの母親は、将来に極めて明るい展望を持った

層である。ところが、高校で有名校へ入れる予想の持てない層はどうか。高校は有名ではないが、「一応のところ」へ入れそうだと予想している層では、「一流大学」への入学予想者が、ぐっと下がって、3.7%になり、一流はだめだろうがそれでも「まあ有名な大学」へ53.5%、残る29.6%が「まあまあのところ」ならと考えている。ところがその下の層、すなわち高校は、有名校は無論、一応のところも入学は望み薄、「まあまあ的高校」しか入れないだろうと、悲観的な観測をしている層になると、「一流大学」へはわずか0.5%、「まあ有名な大学」へも7.8%、「まあまあ」の大学が54.2%となり、逆に「あまり満足できる大学に入れそうもない」とする層がぐっと増えて、11.8%になっている。すなわち、近い将来の高校入学に、明るい見通しを持てるかどうか、その先の大学進学への見通しを、ある程度決定的なものにしている様子がよくわかる。敗者復活の可能性の期待できない厳しい時代だと、母親たちが考えていることがわかる。

さてもう少し先を展望しよう。図15は、子どもの人生の予想である。子どもが「偉大な人物」もしくは「エリート」になれるかもしれないと考える母親は、合わせて4.7%。また5%に近い数字がでてきたのが面白い。しかし、全体としては、エリートの暮らしは無理でも、「ふつうより上」の暮らし18.1%。「ふつう」の暮らし74.4%と、とにかく「ふつう」か「それ以上」の暮らしができるだろうと考えている者が、圧倒的(97.2%)である。そして、表20に示したように「エリート」としての将来を予期しているのは「一流大学に入れる」と予想する層にほぼ集中しているが「偉大な人物」には大学のレベルに関りなく予想がされているし、また「ふつうより上」「ふつう」の暮らしの予想も同様に、大学のレベルに関りないことがわかる。そうした楽観的な予想ができるのは、今日の経済大国日本——豊かな社会に住むわれわれのしあわせであろうが、果たしてこれほどの楽観が今後許されるのだろうか。

次に「子どもたちを、どんな職業につかせたいか」を尋ねた結果を、図16にまとめた。専門職・管理職志向は、7%強、セミ専門職を含めても約15%程度で、半数近く(46.4%)がサラリーマンを、20.6%が技能職(これは女子の場合に多く、看護婦、美容師など)と、思ったほどの高望みはしていない。それほど個性的な職業にはつけないだろうが、このままいけば、まあまあ暮らしはできるだろう——という安定した見通しを持っていると言える。

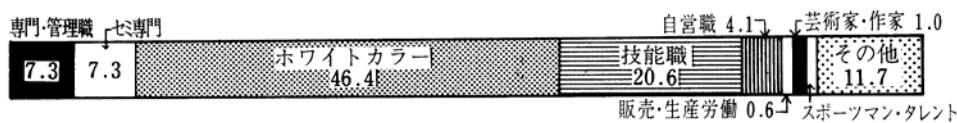
図15 子どもの人生はどうなっていくか (単位:%)



表20 大学予想と人生予想の関連 %/N

人生の予想 大学の予想	偉大な人物に	エリートに	ふつうより 上の暮らし	ふつうの暮らし	やや下の暮らし	よい暮らし は望めない	計
一流大学に	9.8	37.2	27.5	21.6	3.9	0.0	100.0/5.1
まあ有名大学に	1.8	5.0	35.6	57.6	0.0	0.0	100.0/281
まあまあ大学	2.3	1.7	12.5	80.9	2.0	0.6	100.0/353
あまり満足 できない 進学しな いだろう	6.1	2.3	7.6	76.3	4.6	3.1	100.0/131
	0.9	1.3	10.0	83.9	2.2	1.7	100.0/231

図16 子どもの就職先 (単位:%)



# V章 母親たちの未来

—— その幸福と不幸 ——



人生も半ばにさしかかった母親たち。結婚、出産、子育てと一生のうちで最も多忙な時期もどうやらヤマを越えかかり、ホッと一息という日々かもしれない。子育てはあと数年で終わるかもしれない。しかし、母親たちにはこれからまだ40年近くの月日が残されている。この時間をどう使い、自分の残る人生をどう充実させていこうとしているのか、最後に母親たちの未来への展望を分析してみよう。

## 1 生まれ変わるなら

どのようなコースをたどるにせよ、人生には、さまざまな形の制約がつきものだが、とりわけ女性に課せられたそれは大きい。女性の社会的地位は上がり、あらゆる教育や就職の機会は与えられたが、出産、育児という生物学的に課せられた役割のゆえに、社会的活動や個人的行動は大きく制限される。この役割が好きで、これをすすんで受け入れる女性たちはよいが、そうでない女性たちにとっては、人生は極めて不自由で束縛の多いものと感じられよう。

このような性役割の受け入れ方は、ある意味でその人の環境適応の良好なことや、幸福感、安定感を示す指標であるとされる。また、女性の場合は、時には制限の多い女性役割を受け入れないことが、望ましい「不適応」すなわち積極性や、やる気の指標と見なされることもある。したがって、「次の人生では、男女どちらに生まれ変わりたいですか」という性役割の受け入れ方を尋ねる問いは、よく社会調査に用いられるものの一つである。

同様な質問を本サンプルに行った結果が、図17である。次の世もまた女性にと、女性役割を受け入れている者は52.9%、男性への生まれ変わりを希望する者よりも、やや多い。

この52.9%という数字は、一昔前とは大きく逆転してきている。例えば、1958年統計数理研究所が行った、全国調査によれば、女性の64%が男性への生まれ変わりを希望していた。一般にこの数字は、女性の社会的地位の指標とも言われる。女性と男性との間に、社会的地位を始めとして、多くの差別があり、女性が不当の虐げられた生活をしていると、女性役割の受け入れが困難になって、逆に性別に伴う不利益の差が少なくなると、この数

図17 生まれ変わるとすれば

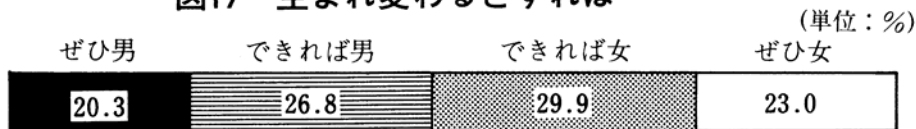
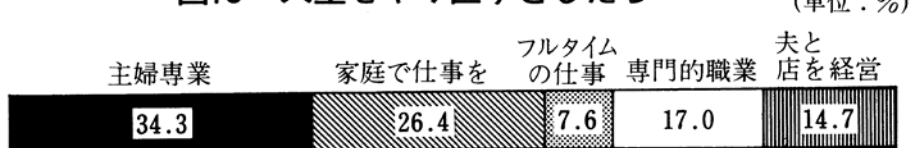


図18 人生をやり直すとしたら



字は低下する。日本でも、この20年ほどの間に、完全に数字が逆転した現象が見い出される。本調査の、男性へ生まれ変わりたい者の割合47.1%は、最近のデータでは、それでもやや高い数値である。これは、対象の年齢の関係で、若い女性ではもう少し女性役割の受け入れがよい数字が得られるであろう。これは、中年の女性という状況が、ある意味で女性としての最大の仕事を終わらせた、そこはかたない不満や寂しさに裏打ちされている数字とも言えるだろう。

このような性役割の受け入れについて、もう少し詳細に分析してみよう。女性役割を受け入れている者(女性に生まれ変わりたい)と拒否する者(男性に生まれ変わりたい)との属性を明らかにするために、数量化II類を使って、多変量解析を試みた。図19は、性役割の受け入れを規定する要因の偏相関係数の大きさに反映されるので、「生まれ変わり」を最も強く規定しているのが、「現在のしあわせ度」次に「人生をやり直した時のコース」「学歴」「現在の仕事」「子どもの成績」「年齢」の順である。

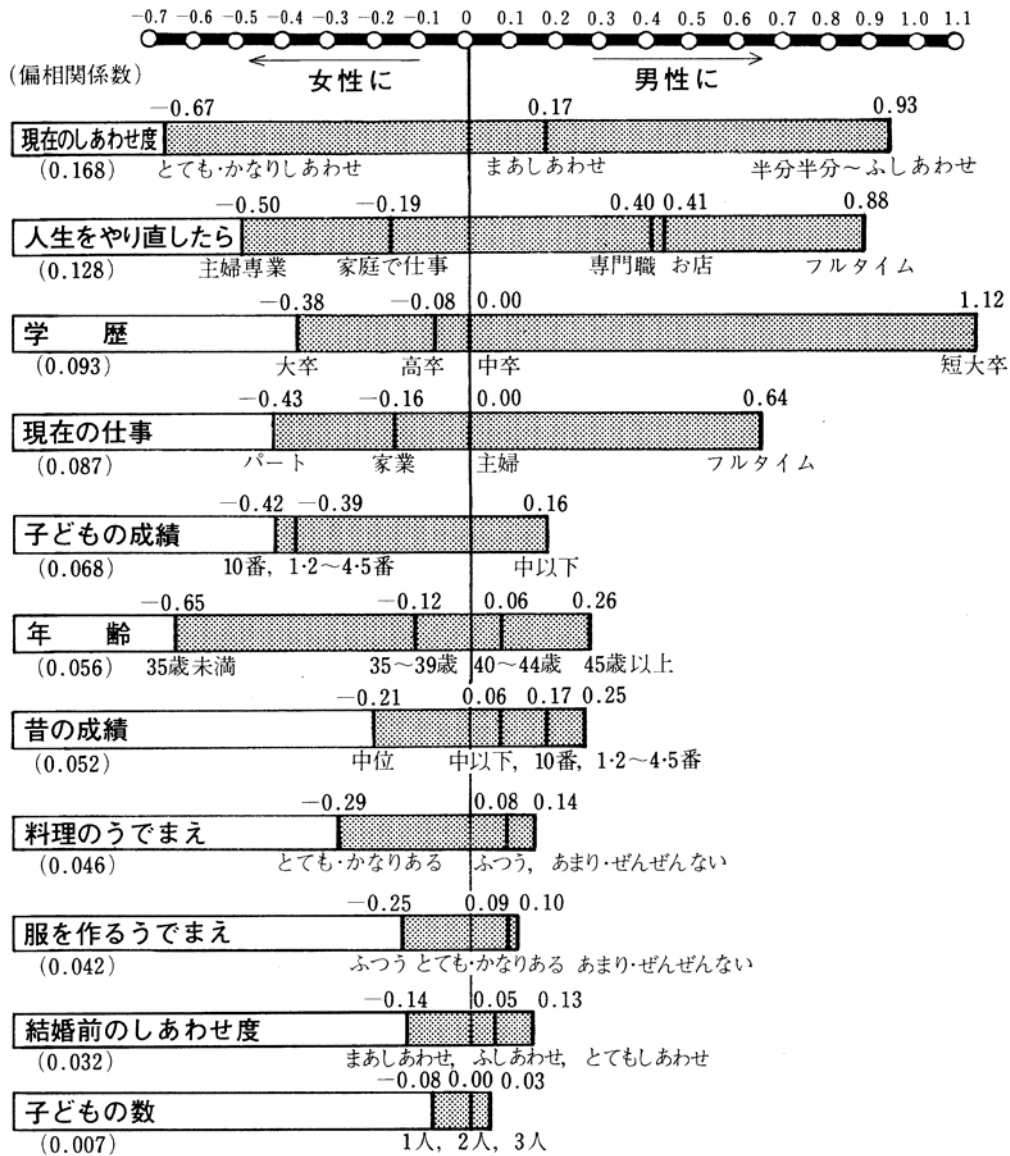
図19には、「生まれ変わり」を支える要因のカテゴリースコアを、示してある。

これで見ると、男性に生まれ変わる希望者(女性役割の拒否)は、「短大卒で、現在あまりしあわせでなく、職業志向が強固な(現在もフルタイムで働き、やり直してもまたフルタイムで働きたい)層であり、逆に女性役割の受容者は、「現在とてもしあわせで、年齢が若く(35歳未満)専業主婦志向が強くと、子どもの成績がよい」層である。

すなわち、中学生の母親たちのうち、「比較的年齢も若く、職業志向が弱く子どもの成績も良い」層はしあわせ度が強く、よく現在の環境に適応して生活しているが、「年齢が上昇し、やや学歴が高く、職業志向の強い」層はしあわせ度がとぼしく、環境適応が必ずしも良好といえないことがわかる。

このように、一口に中学生の母親たちと言っても、種々の感情や欲求を持ち、異なった属性を持つ層に分けられるが、全体としては、図18に示したように、おおむね(6割)が専業主婦志向(せいぜい家庭でできる仕事を副業的にする程度)で、空想レベルでも、職業志向はそれほどでない。とするとわれわれが、教育相談の臨床で、中年主婦の面接を行う際にしばしば訴えられるフラストレーションは、子どもが思いどおりに育たない(問題児)ことから生じてくる反応であるのかもしれない。すなわち子どもさえまあまあに育ち年齢がそれほど高くない母親たちは、いわば、まあまあ家庭生活に適応し、「ひなた水」程度のしあわせ感にひたっているのかもしれない。

図19 生まれ変わりの希望 (カテゴリー・スコア)



## 2 しあわせ感

さて、この「ひなた水のしあわせ感」の存在を、もう少し追跡してみよう。

表21は、現在の母親たちのしあわせ感と共に、過去にさかのぼって、しあわせ感を思い起こさせた結果である。

まず、現在については、「とても・かなりしあわせ」な者が42.7%、「まあ」を入れると、しあわせと感じている者は、80.3%にも達する。自分の現在を、ふしあわせと評価する者は、ほぼ5%でしかない。

また、しあわせ感を過去にさかのぼって見ると、意外に数字の変化が少ない。「とても」「かなり」しあわせな者は「現在」にやや多くなってはいるが、それでも過去と3~10%前後の違いしかない。「これまでも、まあまあしあわせだったが、現在は、まあいちばんしあわせ」というところだろうか。

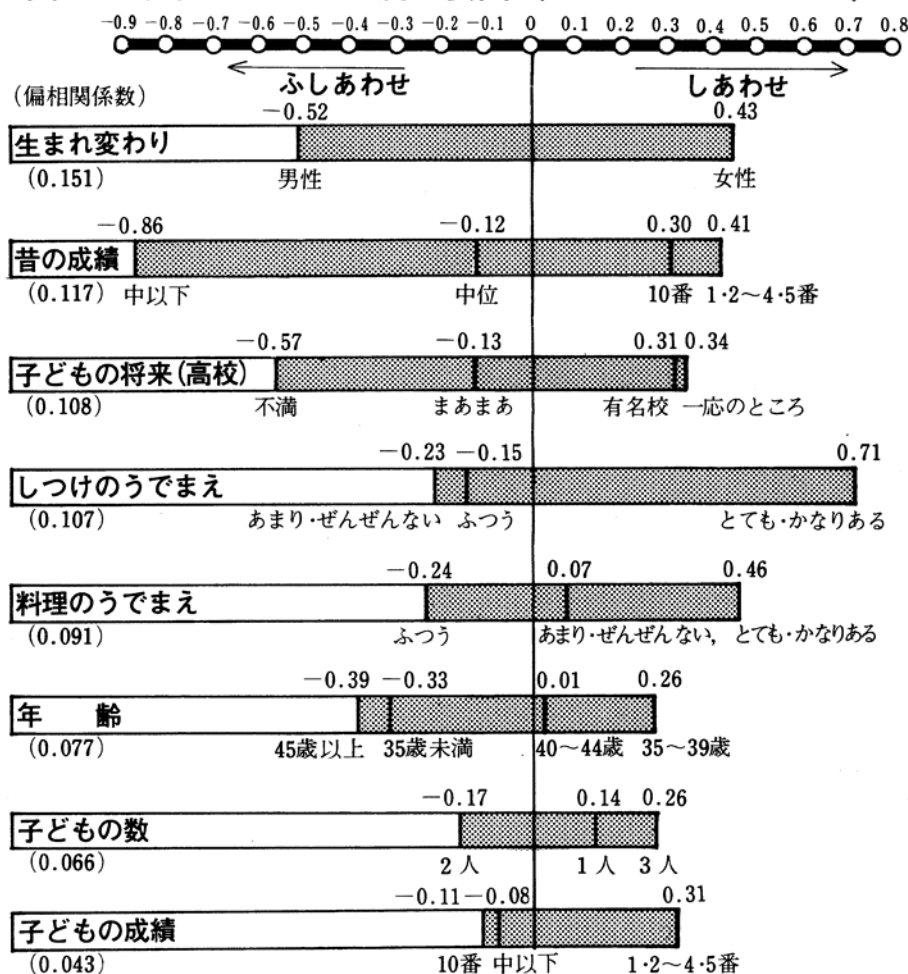
表21 六つの時期のしあわせ度

%/N

	とても しあわせ	かなり しあわせ	まあ しあわせ	半分半分	まあ ふしあわせ	かなり ふしあわせ	とても ふしあわせ	計
結 婚 前	18.0	14.7	41.7	20.1	3.2	1.4	0.9	100.0 / 1053
	32.7				5.5			
結 婚 直 後	16.4	15.9	40.0	19.0	4.0	2.5	2.2	100.0 / 1050
	32.3				8.7			
第一子が生まれた頃	20.0	19.2	37.4	15.0	4.1	2.0	2.3	100.0 / 1053
	39.2				8.4			
幼稚園の頃	17.4	18.7	38.9	16.6	3.7	2.0	2.7	100.0 / 1050
	36.1				8.4			
小学校の頃	18.5	18.7	39.4	15.9	3.5	1.7	2.3	100.0 / 1040
	37.2				7.5			
現 在	22.4	20.3	37.6	14.9	1.8	0.9	2.1	100.0 / 1052
	42.7				4.8			

さて中年の主婦たちが、現在も過去もみな一様に、なんとなくしあわせ——というのでは、どうもすっきりしない。しあわせかどうかはむろん全く本人の主観であるが、それでも、もう少し個人的な属性との関りが明らかにされないものかどうか。そこで、数量化II

図20 現在のしあわせ度の要因 (カテゴリー・スコア)





類を用いて、しあわせな者(「とても・かなり」しあわせ)と、ふしあわせな者(「まあ」しあわせ～「とても」ふしあわせ)との属性分析を行ってみた。図20には、しあわせ感を規定する要因の偏相関係数を示してある。

「しあわせ度」と関りを持つアイテムは、「生まれ変わり」「母親の昔の成績」「子どもの将来の見通し(高校)」「しつけの自信」などである。そしてとくに図20に掲げたように、子どもの「しつけ」に自信がある者は、大きくしあわせ感を持っており、逆に母親が自分の知的能力に自信を欠き、子どもの将来の見通しが暗いとしあわせ感が大きく阻害されることが見いだされる。すなわち、主婦たちのしあわせ感は大きく子どもに依存し、とくに将来の見通しに関するような、子どもの能力によって左右されていることがわかる。

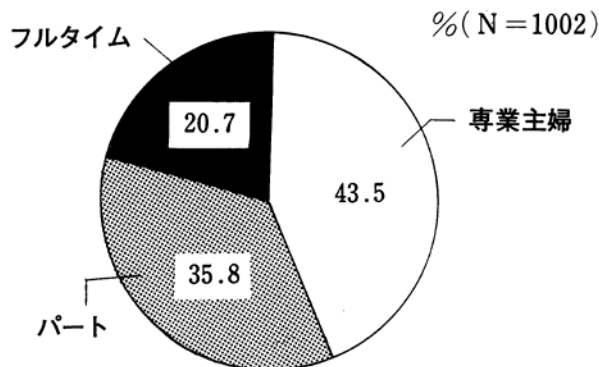
### 3 母親たちの未来

さて、最後に、ひなた水のようなしあわせの中にある中年の主婦たちが、この先の人生をどう設計し、どんな将来を予想して暮らしているかを見ていくことにしよう。

まず、とりあえず今後の生活について、図21をご覧ください。さきにI章で掲げた現在の母親たちの職業(主婦も含めて)と比較して、今後のコースに大きな変化がないのが特徴だ。

- ①現在の専業主婦は49.0%、これが43.5%に減っていることが一つ。つまり単純に計算して、わずか5.5%の専業主婦しか何らかの形で仕事を持つ未来を予想していないこと。
  - ②フルタイム就職者が現在11.9%なのが、わずか8.8%増えて20.7%になる予定であること
- この二つだけで、その移動はまことに微々たるものでしかない。

図21 今後の生活での職業希望

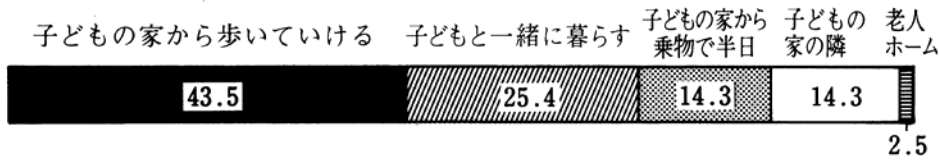


これは、中年の主婦たちが、すでにある程度将来の生活設計を実行に移しており、むやみに夢を持たなくなっていることの表われと思われる。例えば、パートで働きたいと考える者は、将来まで待たず、現在すでにパートに出ているであろう。またフルタイムの就職希望者は、中年を過ぎてからではフルタイムの就職が極めて現実化の乏しい望みであることを(日常の見聞を通して)知っているのも、すでに無理をしてもフルタイムで働いていると思われる。そして現在フルタイムで働いていない者は、すでにほとんどその夢を捨てているであろう。また専業主婦の割合もあまり増減がないが、この中には、一度以上就職にチャレンジして失敗し、今は外へ出る望みを捨てて、堅実に、または積極的に専業主婦の座を守っていこうとしている人々もあるのではなかろうか。すなわち中年は、もはや大きく夢みることが許されない年齢なのである。

さて、次に、もう少し時間をのばして、子どもが成長し結婚した後での、同居・別居の

問題を見ていこう。年をとった親が、子どもたちとどのくらいの距離を保って暮らすのが理想かは、一概には決められない問題だが、本調査の母親たちは、どう考えているのだろうか。図22に示したように、一口に言って自分たち夫婦の「個」を確立した、または西欧型とも

図22 老後の理想(%)



いえる暮らし方は、あまり人気がないようだ。「老人ホーム」はわずか、2.5%、「子どもの家から遠く（乗物で半日）離れて」が、14.3%。残り83.2%の母親は、スープが冷めない距離か、またはスープを運べる距離を理想と考えている。すなわち

- ・「同居」25.4%
- ・スープの冷めない距離（「隣家」）14.3%
- ・スープの運べる距離（「歩いて行ける所」）43.5%
- ・離れて暮らす（「子どもの家から乗物で半日」と「老人ホーム」）16.8%

というところである。数の上では「同居を含めてもスープが冷めない距離」(39.7%)よりも「スープを運べる距離の希望者」(43.5%)がわずかに多いことは、ある意味では現代の親たちが日本人的な心情を必死になって抑制し、子どもに依存的な心情を残しながらも嫌われない関係を作ろうと努力している様子が感じられる数字である。

さて、もう少し時間を追ってみよう。本サンプルが60歳になった時、おそらく子どもたちはすでに結婚し、夫と二人だけの生活が展開されているであろう。図22の希望がもしそのとおりに生かされたとしたら、(子どもとの同居を除く) 74.6%の母親は、夫婦二人で暮らしているはずである。その時の本人の心の支えを予想させたのが、表22である。

まず、「あまり支えになりそうなことが思いうかばない」者が、9.6%。90%の者は、何らかの支えを予想している。支えとなる項目の中で最も人気がないのは、「会や地域のリーダー」のような、社会的な活動だ。残りの項目を見渡すと、全体が二分できそうである。「旅行」「趣味」「読書」などの個人的活動と、「友だちづきあい」「夫の世話」「孫の世話」などの対人的活動である。

このうち第1位の「旅行」は、他の調査データを見ても、老後の楽しみとして筆頭に上

表22 60歳時の心の支え

順位	心の支え	% / N		
		yes	no	
1	旅行	55.9	44.1	100.0/1114
2	友だちづきあい	47.5	52.5	100.0/1112
3	趣味	45.5	54.5	100.0/1113
4	夫の世話	43.8	56.2	100.0/1114
5	孫の世話	38.7	61.3	100.0/1114
6	読書	25.2	74.8	100.0/1113
7	現役で仕事	15.9	84.1	100.0/1114
8	支えがない	9.6	90.4	100.0/1110
9	会や地域のリーダー	4.8	95.2	100.0/1114

がってくるものの一つである。旅行に対するこれほどの渴望はどこからくるのだろうか。ある意味では旅行は、もはや翔ぶことができなくなった中年の主婦たち、または老人たちの、「変化」や「冒険」への代償的欲求充足なのかもしれない。しかしこのような願望を内に秘めているとしても、現実の「旅行」は、欧米の人々と違って内気で社交下手の日本人の場合は、友人たちとの団体旅行を意味するであろうから、これもかなり、対人的活動の性質を持っていると言ってよいだろう。とすると、彼女たちの老後は、家族や友人との関係が、かなり比重の大きい心の支えになると説明することができそうだ。

しかし、こうした人間関係を心の支えにするだけの仲間を、いったい母親たちは現在持っているのだろうか。

これからの世の中は、おそらく血のつながった家族からも、老人というだけで、尊敬されたり手厚く遇されることは期待できないと思われる。老人に対しても、何よりも人間的な魅力が要求されるような厳しい時代がやってきそうである。果たして今、中年の主婦たちの中に、その人柄の魅力が蓄えられているだろうか。まして「友人」ともなれば、長い一生を通して、いつの時も、積極的な関係を作っていく努力が必要であろう。果たして現在それができているのだろうか。

II章で指摘したように、昔の母親たちに比べて、現代の母親たちは、比較にならないほど、行動の自由の幅を持っている。しかしその自由な時間的なゆとりを、いったい母親たちは、最大に利用しているのだろうか。現在は一応しあわせだし、過去もしあわせだった。そして将来もまあしあわせだろう——という見通しを持って暮らしていけるのは、結構には違いないが、果たしてそれでよいのだろうか。ゆとりある時間と人生を送れるようにはなったが、「しあわせ感」が、子どもや夫だけに依存して生み出されているとしたら、形は現代に生きる主婦たちでも、意識は昔のせまい、ある意味では家族エゴに徹して生きた主婦たちと変わりがないではないか。

そうした意味では、ひなた水のしあわせの中で、子どもの将来と夫のことだけに関心を集中させているような主婦たちの暮らしを、もう一度考えなおしてみる必要があるのではないだろうか。

さて最後に、蛇足とも思えるデータをつけ加えて終わりにしよう。表23は、彼女たちの5年後、10年後、20年後のしあわせ度の予測である。何年後をみても、彼女たちは、いつも、しあわせでいる予定のようだ。多少ともふしあわせを予測するのは、3～5%にすぎず、「かなりしあわせ」が「とても」と「かなり」を合わせて35%前後、「まあ」しあわせを含めると80%前後が、しあわせを予測している。老後について、多少とも危惧を感じているのは、「半分半分」が20%前後、ふしあわせを含めると、25%弱にすぎない。

いったいわれわれの未来は、そんなにもバラ色に輝いているのだろうか。

表23 今後のしあわせ度

%/N

	とても しあわせ	かなり しあわせ	まあ しあわせ	半分半分	まあ ふしあわせ	かなり ふしあわせ	とても ふしあわせ	計
5 年 後	13.1	18.4	48.3	17.1	1.7	0.8	0.6	100.0 1052
10 年 後	13.0	22.2	44.0	17.8	1.6	0.7	0.7	100.0 1040
20 年 後	17.2	18.0	40.0	20.2	2.7	1.3	0.6	100.0 1032